源氏目案　中

源氏目案巻第三

よ

一 よのおほえも　御門の御おほしいつくしく末代
まくらすゆへし　一よるのおとゝ　河　霧
一 よせすく　猶若　明信　二縁し
一 よしさんハ　下絲　ふ若　わくあはれをや
一 よこさしきふれん　さまてもあれとも
一 よしやよこさしよふ詞とい云方のよふ
ミりとれるふいふ所をさ不縁可や
一 よもミふ　道のやかれてたまうよか

九曜文庫

一 よこしまなるやうにゆく 横訳して人のそね
みをうくるを花すかとなし
一 よめのみし 良家し 淳源なより守書
にんさもは不孝書戸一つや 一 世人 よのつれ
みなよくのつくしもへし 清守のほど世のつる
世にまよひもい恐わりあし 一 よろ人たゝうへき
あつわい又家に思 あうもののあし 又あつわ
よ源も御よりもや 西流 一 よろひ よるわと
一 みすの 深し 流への事しきり
一 よのつねのうかれさゝすもひ 色いさうなき女

れのよとてのかつきやうつさへとのかし
一 よきの 不孝や 一 よろわ よろへと深し
終とさん 一 世をそむひとうやまは
人もわつゝへのやましけり
一 世のつとひして 継母 継子のなかあしきや
一 よろわひ ゆるこ原に囚すこと
一 よきうつ 寝食 又 浴 一 よりてしてよ女も
きようかみのしゝくて よりてしてとくとし
ろうさすかのしや 一 よろひのわかま＊
うし 隣氏すうち こや寸浴 すらち

一しらね廿つねと一しんきすみ氏忠のこと
しんよりこのくしらなり一(こう紫)りきり
と まされりけれん一 あつ〇うらの物語
わらわまれい長宿 よもいまつて
一よつりより 世まれすかて
一世(示す)のきりよ さらの慕といめりとさの家とい
りうけもりこ世と云て 一(云)しの氏 まめ
ゆらりやらは源のふとそてあり
一(きりやうのう)しるくつ まてしとわらまさくつて
一(きりのきん)世をうね 世しきあ前し 一(わかひ)世の中うつて

桐壺のうしの後くと朱雀院へゆつりまいらせ
一世のさらと 世のうつひし 恐れ多く万葉用
一(こうま)よ川の侍統 中宮にのおちそりの恵心僧
都と横川に侍統とうけ
一(侍之)よらねてしと そてかれい 源氏大将のこと
うろへ一 西成すよの八乃文にすまれ
名つるや宇治乃そうしかてらん
一(きかし)しり侍よ けうくよりめしよ夜すかれ
きりさらしとや 一 りしさしもおすす越
よく半 家つ侍うへし ゆすしといさとの

ゆきのなどへのしきや　延尉佐別當のりん
たゞよて　一りうりんしりひりたん也乃　史記曰
尚き経すし趙東京居名十二歳也王居住
信ぬ庵急より七寸のむとつゝて絵まはす
ておんと報しそりた信けむとありて楚王處
彼中ふうりのふ有光明名君夜光也
一　世をそしり給へるゆゑ文字隠者とよて云り
一　ようねりの　檀木見よ行しきしよ老女
おきもやらしさる　一　しをきのおし弁良房
のおしれ別てわくさると川しと住侶　よその例

まうのよりとるさ　河内寺　俶良房らさとふるの
まれ不足さしうすらやまし　らりく
よろし　一　四まらくとさて　よみ名あ
経よ祇伊園也ろのとおりは補うひみさる
松ちふ七名房と風のゆとよりは中角八
叶のうらはさん也てきうろうひりまり
あまる云ふまも　とさいもうて金服御り
しやきあのうれ　中りのとつうきまのそ
東れらんうるよ　長乃らちあらんのさる
いろのもやすの俾のしとしく我れる印小

よいねのうち申事とかゝりとてすりしとゝ
はしくと候すなん 一 世みさとひのうらぬあふそ
まして めらのうと又しやてしこゝゆわり
一 よはまく 弁 めてそろふてろかり
一 よろこひすゝし 五ろう候三位し始めと
一 よさらはもゆまえ人名れい 少貮執行人 字千宗
剣兵堀川の北か 宰らる 翠千の 坂九条
称呼まてかうちうのゝ様されの弁と流
一 よのてはれ 末摩候のあ泉氏賀ときこま
見としよのうつよまうすとし候とくくさあ侍し

い

一 世とられ 世とられといふ世とかうろ
さいのまりや申すりしたゝいゆ花とうら
いまうそかし 称わそうすの不くとうてまりん
よのかみり 一 よりくうすしとら 貴くと候
すいは小児女子あるとこめひしくしうらうや
様言人云 史英不須沈さいのすや
一 よのはは 像れうろくとうたりてかうしおも
女三乃はちんあるは 懐素のしや面影
とよれのさらる三尺のりうろく遣るを
うり衣ゐさうかいすしれうろのうとやまよ

うつやうれしとうるはしくなし　一しらくもしる

慈鹿火焼　蚕飼尾　羽抜　蚕ハ尾をもつ源ハ之

よう別なしとし源のこひいひも房とし

一しもそてハ　橋本　草なさすくしてとさ

はなしんのもし　一世はいふ　八重まもさく

しもて八重の世とわひはてしとの後にう

冷気八はんいうしつもえうしさ後のあらの也

一御年のこゑうきと　富とえし蚕のす結さ

一世はぬうしすさ　ろ恵とかうよの中て

らこうり世まえしくといふり　一しさみうの

諸　俗にうけとすうとうて　諸らまけぬし

一しらくてう　わさうわとろ恵よひてた

見ましらくて年の見くとみへよのも

一しくをと中ま　方士　みまと　氷つ富ら下

東本方祇園天満　建仁寺見霞立仙山多橋

園西廊下ま洞戸東福岡　吉門　吉田き死去

三院　長楽寺　一しきうのまろね　しまさの

らけきニ前よ　一前らてよの山如へし

た

一玉のくさみニ所そ　玉いおうまう洞し　玉の後

とりのまくら 一 さゆる 冬 かくさるへし
一 なよたけ 雑也 一 ふすま 非懐
一 たく 遠ちかくても同 一 ふるさとゆくさへ
は言をし 幻術士の名也 もの[illegible]は家
のかねいれ わらしとくとそり
一 名残の表 未来 柳 月花なとさへは此の名
や 勿論はちらんの也し いえらは[illegible]
重き柳にやさしとおもへより
一 名所の花 林中に名所としるて
さはくえくと二句まての[illegible]十句のへたつへし

いつくこしかすみのは前句とすへし
一 あいくしき 退数 一 うきよ 可然 不審
一 うき人 うき世ともし 後の世の句をすみ
よめるくわのは恋人との前句根まへ[illegible]なは
きはさらるすてし 一 あつさ 便
一 たしかなる 後し うき人めかは 懐し
一 ふせふて 旅人の気色とすへきるなへ
くり 一 去日殊よのみんも あるの
まくらよまそらつらたつよりりゆかく
てゝすくし 一 [illegible]の身にもたちのひとる

よしあはれなし　一あれなりの　将むし
一たちうき　二句隔　一たとへはまさしくまなし
しは御事也　一たとへん不可別する守
るや　一ありうき　異氏なし
一かりひし　仕様やうへなし
一なそられ　猪らしきふれまて名を嫌
一たゆまれ　しらぬまへし　しるしいゆるし
一滝口　かつらのみくに　紫宸殿にて滝口の
一宮ゑゐたる人　武家よりはとりとりや候へそしは
武士家にもなし　候の事のまと号して回降

こまふかなり　一あきこ　不風也　努てれ
しとさし　一あむしを　まへ向　様ら人
よ遠つ物し　一不在の様よりその名の人ゐ
不在の様し　禁門ます也　一件の書のつる
きりは回月よりふうくしは一段字年にて
国司よりそりては入年かはらう寸うら可り
その文段にしる源氏はひあかる人と立て
らもひうらし　一不加之のひとき　宗祇海
一二三たうとまれ　見くいると並てまり候ふ
うるすのとうかまれてさうつくへくしれる

とゝのへ　一たつる　むかしの所かな
一たからやすき　まやすくしたゆるの字
とうてより　一る歌ともいふらんみても
よしとも此下の京人座にはそれを侍し
禮記記曰隠敷在庭琴瑟在堂今案志敷
は心堂下まで升して也但寛治八年五月廿八
日高陽院競馬六番の時まて自吾歌ともいふ
なふさい付堂上すまくや
一らうたし　禁中にて女房達我かいとし
一あさかやき　阿娜　其兒塞一（前の事之）しらんかんけて

前集云　荒井一儒者仰せらるものゝ中に於て
ゆゆしき韻字ありとて中院より庭中の文
臺のかくはる家の次將御料の韻二字と
さらりと見えたつてしをきら自ら家にきけ
しりのかりをとるすの次に文と尾する庭
よりの文人に名みきのかりとしける
一字とさらりもとふる有村名としいさうあれ
のまゝ集にかくし今案韻は名の一字の繪も
ともみんちゝかうや在よ儒者のちくて
つまうに春日同賦詩次韻探題名合一字處

一 襲浮 按段 長字 くのしくかくつきなり
一 右府（うふ）の書 右府ハ実隆より世にしやくらて
道才ノ職也 源氏ハさし時実隆右府や宰相兼
右府の刑 藤原房前ノ以テ常行 一条摂政
一 右府ノ書を得てまつりき 実隆二人の同
一 人上てわうしや 祇園し
一 右将（さうま）の書もしと給て堪 豊らのさうひ
さらしらやすしてたい源氏びて書なりし世
ふられ文 地のさのくらうもなせれさ
一 たまくられ 僧 書れわてし

採薪及菓蓏皆拝恭敬矣 旡咎 自序本
一 たしかり（従ア） 結わりて 一もとれわすれはゆく
并 天もんんとかうしてひとまつりは
ちまんへとれこうこれあけりも月ろうも 菩
一 竹わうの垣 立架ニ云竹輪章管石沼杠
桂竹編墻 白氏文集 一 たきのもとまて
僻基 緑浸書 累筐続帰基 和同そては
見るゆくりのし わくう 一 （寺）さりつゆき よう
こまかさもし 粛まちてる
一 たまもすし（わし） 海辺よたしりきむ 豊いは掠よ

三后并女院の衣裳まてとゝのへさり　堂ハ女院のつさ
ぬしとふりのたり　一　たゝうとの御さき
大后九の女御ひとりハうちにおはしまし承香
殿の女御とてもちゐられ給ふ也
一　天子之皇后　申后の御まに御位につかせ給ふ皇
大后をハ御めのとに参らせ給へは河海抄
大后の皇太后ハいとこのきミのうちに女帝ハ
みかとの御位ニおはしまして后の御ことく
三后ハ女院になりしつき給はんハ小一
条院のことくに大后天皇のおんなこと也
御封戸并官爵等すこしいさゝかかはりも
なかりけるうちに御かとの御ゆるしにて封ハ
封戸をもたまはる后をハ三宮ハ三百戸給ふ后天
皇のみなしとて二千戸給はりけるとかや院号
ハ女院と号したてまつりて封官爵　院司
や　三宮ハ天皇后宮皇太后太后
一　后と申ハみかとの御めのひとりにてまし
一　女御　勅撰山の女院のもとにて
りし民部河原のとしとて同しき
みやひとつふうとしハ河原ハ縁者し

一ゑうう　やつてまかうつんとしやうちうんハ
悟言通祖師をやうらん　わまうのうん
らてなとめくし　一　塔こかうしうんも　青、
女貞女しつりうくてわまいうのうさひ
まそうして　塔のへ　とミかうてやうさわし
よりしやう丁こかうてうりもうり　河　新撰
ちうしく　之と　花うらてれ中冊とめ待しミ丁
こゆつし　斗　ひさやうミかうろ女のりぬへ
一　行をめ給や　梅つれのまし　一　女さうの
ろうえつりふ弥らめとし　貞観十八年二月九

大日以作の流石覚寺くとつうりろ小野篁
もも滝宮カり　一　ちすさ川ゆひ　又すき
かくの答とミ一流よも書き絶えて　あとさき
つまてうへし　女はりけ帯ととミ
一　ゐうらなミち　西三条右大臣良相ハ閑院左大
臣冬嗣公の五男　右大臣の男　あすの在
とすふけ本乃例し　一　ろ内大臣よしみの在ハ
て　円融院摂政　堀川関白　忠義公　兼通　天禄三
十月廿七日内覧　同十一月廿七日　略し　関白
ましこの　一　在の日の書つくさけうん

月丑日よりつもりハ丑二つ日ハよの丑之儀
よの丑にも有例也丑日ハ乗燭之後宣旨ハ
大臣也上卿の日ハ童女御覧辰の日ハ大臣
也しりの宣命也日や辰の日の宣命なと
とうとりとハ宣命し其明宣命ハ同日の辰
の日しりハ大臣の形ハもらすきれしてと
よ丸わりもてハけいやうしも
一 たうもりのつきもり 出居 宰相 宰
舞し 一 五節の帳台の日 進士 後回すへ
て舞姫とうくへきのし 賀茂臨時祭年進

臨時つとめ節会のまいつうんし宰相 以下同 略し
咩一段 そのおりハつまてしまきとそ
のそれしもめ中とめつりねたき行幸し
一 五節の豎臣とさいふ一負よ卿 指大納小二
太豎二人小豎二人 不曲ハ大小合史等也り
小執叙舞のけ小卿とと豎 叙舞時のとき
五節豎とうすけ大豎ハ正六位下小豎従六
位 元 大豎ハ正六位下おかの官人しと従五
位下に叙しめれて五節の豎と推すへし
一 五節 不正寄 觀音あるや

一たゆさ 隋宍流 史記 とらつまとさうくし
こゑさうるきし 一あうしも川むけんへる
ねり もれよはひ付るかしいれよ玉くと
かくこふ手すへてさしぬ桐のかくとみ
とふゆや 一たさらくうん 六日武佐寺
きりやまて 弁毬のこしき 唐人のおき来
まてるふぬりて毬よとてしわくと弁毬
とこえ付うう手すう手は弁毬手といふても
例藤利と云ものけりしめ日うるかやう毛よ
うらすせうぬかくんもやういうすけはさま

わゝ手まし 一そつうつるよ らうみさうれと
月うさ倒し 半わるるを 一ゆきて三ところ
やりうくし 一じつゆつまよ 今いらんうねつゆり
まおいあくりやうましいうさらて 一さよ水にひ
まおよそてわうぶ汐るて湯に わうるとし
一ぶんのつくを 脇よ絶よふひあり
一めぢやめ 細女 宮中もうへうるよ五の
もうさんしや 一そうえ文まうすえ浮
祖のちて云とそら文申んすみ給し毛之
はんりかけよ手例さしうる寸 一あめのうま

年のうちし まつりたまふ 一たいこやくる
まいりて中宮の大饗にて本とさうのこ
とくは家の御ふよさやかよみもし 裁 正
月二日その家大饗なし西の記に大饗を
白大掛二かさね中倒て同色一くさね衣衲大
掛下かさね地白浮線綾御色小掛入唐納言一
連かく略し 一年しよりみね 後鳥 深くて
一たらして 綱文 蝶一たもさらひとしき
せつさもも同様かりて給へし 一たれうえ
ゆいはうしつれの樹竹とへきうしもと深成て

さひ給うさめやくとうりて見て田でさんさ給と
一たらせよみわかえん ひゆうきのうくと法橋彼法眼
さよ午文時しわりて当夜の分みふそて
とくへし 一たく 大曲し 一 とりくりく
ゆうかもらひえりてさ命うれい猿まめさ給
りこち館よ世うて言うしてさんとして
出てと館らくてよまもし 一たさる 単し
一たさうらきんさん 掩後の東 猿彩及葉疏
後町春殿よ彩しうくとうかいて給人への役
まくめ光の日中明し行て以たかわり

一（云）たなこゝろ　撫菓没状接影設会二十余年
経於蔵之経しもの如菅はまるりたしく
わけふしやうすゑもうつては経の形とも
一（云）うつゝのへき　としめくさ身とときもりよ給
入滅のあと常に乏果絶る山の形のわりの形欲きを
見須に世を恨みや源妙典花乃実とは前て
了てあまりしや　一あなのの　須見あなは
うつよとゆんとも　一（云竹川）竹川も　竹河の曲を
うたひしことをほしつるし竹川のうたひ
ものゝ詞書は中ゆるとをさうしくりつくとちる流り

一（云）竹川よ　竹陰もしもやまのひしくもとちる
あさりいうれるつてゆかみとしまりはなんと
早トるや　一（云猿よりも）ゐなもしん　薫　出家したいも
とゝのすんしとあるひしそし　一（あけまき）たつこ息を
くり巻　神楽今　水補沢流桂とも
一 猿のやまり　若猿羿鳴沙月没沢ろ連嶋
りくあ　白氏文集　一 たゝのうゐ　昔は猿まて
あ賀たと今は楼中まくし　菅家は寸り里
自路よくうりて色わかれ足　揖儀の猿さ
新撰朗詠の古賀り　薫は万葉句丸まもト

きりつほしうらん　一文かよはし　文かはしく

よそ間しありハ拜し　一右衛門　武やか備

ゐのうへ　一たまかつら　ゆくまし女

すまちあかしのうち間し　一女御いりにても

こうしゑん　琵天帝歌ハ人にくとつきうき

天し帝夫人ハさしつきのも　一楊貴妃　梅の

宮ふかうりいんすかく天もしとしむるを

三の宮間とつりてうへし　一桐つほ　入ね

してゆきまた人のくゐかりうつぬハ阿くほと

漢の宮文かまてし　一女御きつちらく　御かや

うらみをつしてかりより　一むねあきらかに

姫　毛詩　歌のよの中にと

も此跡しらぬかをもし之跡し　一たまくしの猿子

葬礼記武猿人楮子あん人とものし猿考

してなむつりしうもや宮殿の人と鄭風れ

みそなあひをかりてあそとめのひまし(に)れ竹へ

こさん　一たむかのくさつかり　尾まかうみめの(い)も

ゆうかし

化

一まつひきつゝて　源氏のかきうしや　一ましハみさうらハ

かる　さんでんするこゑし是ハ御くし
一 ほのよゐうつ月日やりのひかり　今日もつう
まうのこと一人　天文暦数風气ことくつ
ふかいのみ天文とハ日月五星九八宿し
まうこすとハ日月の家をもつかてこえ
ようりはくとさつくらし気又ハ風气の運
ふし言ハ人乃文とりて吉凶を見十二
風气をよく知て吉ことやくまつ應和
二年七月九日暑气もひろさしちなへり
かうさりおうりてうつに深つ康和

二年正月五日ゐきゆふさとし二尺ゆり吉を
見东西をもろうの　一 恵ありけさえんと
て　案試　我家ゆきらハ史記とよめりけるし
しくようゆかりの人とききりん章生よ補せ
後の的よ大宮寮そのみこら文才の人々
文章得業生よられ候も進士むり武ハれ
前ゆ通て勤記とありれてゆみをりにする
文章生に御ゆてのちハ才方略の策
と前ゆて汎試をとしあゆりきこハ略
一 思へし　清し　ねんころみんハ一生のちん

てん　さきめ会とたふ一あつれハ例と云り
一すいのくつね（あるのくちは）　くわきれの歌と云り
一すまとう　清まの子也　一すいやうま（あるのくさうり）ね　母
月八日中堂にて也
す
一す経を経　経　一すぬり　そのいろ也
一すゝの人　出るきやうしくらしいはれすまへ
すうりみえしくなる云　一すくし　西教也
一すひつ　安居院　損陳　元服の史見ひ
うまよ母まうすゐまつ　一すこもてそ　足下

花人ともつ詞也　一すゑ　柳也
一すのちるくやうつきと中乃あいて云の
よくとせん乃のにて　一すひつ　源氏也
一すむうま　首也　一すゝつき　側付り
きのめすさくしてみそてすくとすふ
すとしわすくと云也　一すのうしみと
花のうち馬飼のむすわりしとなつ因縁
しるし　一すこけり　えうもすきとし
そうりうて詞也　一すきわすてそくに
きうちさ汚むてし　そのわつかしけ

うきよ也し　一 ちりつれは　来りつれしなりや

一 むらさきの世　今と物かと云し世を

せくよ同し　一 うきたる　をはしるかたり

一 まの人とい　泳ともなくてかり　一 寄ふ

をれ声　虎は八月十五夜のよく候へし

一 うきはしとて三句し　一 うや　神祇し

一 うつきん　琴し　家成わるかたり

一 うや　きらしつ句し　源の物をとさや

一 神くて　さむきる物まとめかさるさめこととし

一 わすれかくし　一 うきたわら　さるきりに

ちよするよし　一 神のうて　とこよと神と

わすれ家のゆかりとて住よませしとて

のりし　一 うちつしきもそてさん　源の氏

ちろえきよみし　一 なれ源のは　誹ちる

くみへき　三南やの連歌のうし　一 神へと

ふるさと　嵯峨の神くと記つる人をとしはいゝ佐里

とよあし　一 うすかみなみし　をかろきぞ

まつのし　頭てよるく　海のかた中に上る

わらくと馬まつよし　紆うらむもし

一 神の口ちよんかりのかつ　弁満亭のみのせ

しゐなるのことくことはやかきかことよ
うつくしき君し神ちくへはすかたの
ひとりの母君のことの神くと思ふましく見
せしも不動尊なとを御のうきの付は
いうしきなかり　一すてめり（言わひ）　善悪ちくは
いはよ剣ちとつよはつきりはしらて神
めりれいつりぬなきへしほねへらをや
湯中よ出りたりのよこやまわの諷をよ
さく流し　一神みたの心乃くりいつり
なん　未勘　一元の文しよ是よみたき

みそしりも元文のともみ書りつしこさと
わかまひるし　一（湯）ちらめせうたく　不蔵と
師と云し　一うしハ一すくとむりらや
こまてくしやうし
帰来倚杖自歎息　杜甫
俄頃風定雲墨色
桂嶺瘴来雲似墨　柳子厚
洞庭春尽水如天
一すひて　かそやうかつすりくん　偽よすりく
としよりと云初く　一す（しゆくし）うえい　う来そてし
一（龍）ちいやき　源の御名そいのせいしわきや
ふつゝとハ色みくしうとし　一うの全

なる　寛平遺誡云　今須らうの中令奏三
人雅楽を令求貢にゆへともいはわすれとも
公宴にはいりしとも上下略し
一　こゆるきの舞うひ　催馬楽六調のうちもかはらす
し家来（御家之家）今日ある所目正一人掌
調習あるなり摩には催馬楽なりゆくところ
舞にあるよろ朝には絶てとをしもや
一　すうよれいまゝしの　嘉和し催馬楽催
（文方）なりゆひゆをこれの乃不待男女とも云制あり
催馬楽呂音二方　一　ことゝ此　東の調子翁も

ことにてとかの絃のしくの唐也
抑ことは人の成績中にとなか
一　くむしや　琵琶者大篳篥也此時あやとふ
よわの別してといゆくて絃　唐琵琶
箕の二絃ある一つわくといふ箏となり
一　くつうるの（和曲てなし）　一　そのの　こときゝめ
さ　楽書の冊文之楽易ある若焼を竟し
感動雨雷之調琴事也　琴書云　弾琴曉香
之業宮し工記　琴絃易宮具白風雨而音
平云鶴之感云鶴下舞

一すこともなくまし すこしのおとしもまさらせ
一すりつる 雨のちのぬるし 一さきのいとちかき
弁 太政大臣 伊通 浅臭 出羽 検察 兼行右
内蔵頭 藤原 朝臣 伊忠 兼年六十年七月十三
日薨 年七十 号八條大納言 年云 一男也 為風
其の乞姫 源氏物語を伝代ちらしてまたしとく
乃く多く加へて きくえもりてさしたるとくと
みな世中のとりわきてさし人に宣ひしとこと
一うらくもかはゆらにて 業平物語言役の
女房にはさそこの中の事に三りよ伝はる
ここもどりてのうえまいりて 源氏とのゝ
出さん 一大の北 八宮のくしつめてうたは
すゑ人 知らぬ ひとりをはつきれ
一すくりしに 東様 御前いきとさしをま
一よて有楽し 中臣を人奉に以て 粉見
寛の伊在家乃侍すて物ありつ思の
とよみそての指をみて指しりてくる京へ
のおはしも振りよりつるの顔して
一すゑもの人けし 女の方ま所い意
のつかはなりかくり 一 すうもの蓋すゝ

きりきりすも事ぞそのよしや
一くつわむし　蛸絡　射肉をふるし付絹の礼
あさ知りて名付るのおとやや　一こみやまし
いはこれよし　一すゝむしさいのゝ人　奨
園中秋扇之　楚王意にまかせ西をゆくに
いのちよすてゝれるなみ年と汐後にふ都して
下句とかしこまりや後はかとされたるとも白
さ扇とかはる青もよて冷しうふみけり
一荻いふふるの　下冷扇薩車夜郭の人寿娟
猶詠三更唱曉　楚俗塞一梔かはし　青の人に

えしめも色かはりやうろくも白ぬとよと申すひ
なり　一さうひ　鹿にふれて　一ちゝろ
生ちゝろちろろうつくしも同じて
一さう猿し　玉のる文を盗むありつくい醒し
一かりて　鵞ぞて人殺しても　下後取も
性殺　思殺し汐ふて汐あ大きな殺の字を以し
一うくつりもくるやうるかり　云里て年
一さむあるき　されどもあるし　一ちゃくしさ
うち人の名乗ちいさやかなるを
つ

一将ゆなさ　哉しけらし　一つまなき　郭公
一つと　集の序記　一つ　飛　わかの人ならはなき
一つかのまつ　よりけつと同し　つまき同
一はなれたんさい　清涼殿の東北の庭同殿の小庭
よ来花たしくうや　一つまく　院記し
一つく　わつまのかし　つみとも
一はるみ母　清書つるうま母のこし　小選
一つさく　深まくのかし　一はしつえ　文頭
くらつえし　一はさくつめ　宮従し
一つらくりれし　秘しるかし　一はるのさそ

世こそ猶かくるゝいさゝうしみちのひまにも
たちそうきんとさりてまきしのさひさ
てなれつるね後し　一将こりふ　将ふ
ささてしらりて　いふ第く　つさくすかし
一つまうさく　よわへねまてあくとさてえるし
将れなきさとちみちそめとこえしの葉
実すきらしけ中ぬはけさんをそくなき
一将いさう　風情　一つさうつ　寒し
一つかく　早卵のくし　一将さわり　夜彩
花菜ゑのもとくてそさゆ春くつまのつらね

一つくしう 言經 非情 一つらゝしてよこ
異 植 衣替 寄合 こと見 正案 一つらせぬ
ゆのやをいふにとかくよりてよるにてくらり
一はなさそく 市女笠ともにかくきく
中山のひるかとなり 一はなさかり 秋の深田し
京本の深田とうちすゑれられいとにわたるし
とうす名ある日のもしうきとかれ末ゐ
本段宿れちやう秋は和紀の方やうれはなく
さをとち神をのはなさうしとやうす 秋陰
畢 八月しるはわきらし 秋はつきらしと

ひとつや 一月のとむ 星あとたえては
禁中へとまいらすゆえに出家ゆへて
切利天上ものくもとし此世のやうにしけまる
こそれよりや 一度ゆきかふさうやもして
ちかへてしまふとすいとれはすくあまたへ
しばらくてうつさしかるゝのまきてはしゆきゝ
ゆりしらや 一つまとかるゝもの 無文字はなる
まい紅葉すうれいせや 一はなりお 秋色て
こし方よりなきのますとようやもやとし
一月のかけがゑ庭りくれし給 月 秋 細 緑 光明 罷

風気如日不伐慈　貴家　一月よのいのちと
ましはるの兄前名入る篝しうすまわり
一にすしまら　執まくらし中晩のひし候
つかくしとみん　一つみしうさ事　ちくい
うつる筆し　織事うさい硯齒伝あり
緒店筆し　一つうさんさ　貪家
浄掃地と東坡流せわり　一体のさされと
ゆうつふてし　燒黄　一にくさわのこ
とれさすれもすいすく振うしこさう風よ
しつてんさんさきすられいうわたと

なり　一つみやこちと　常則は畫工
道風は能書し　一つまさるしのかす
らんの衣は紙さうしとはしくしまさふ
ゆへみえさまとし　一つうらちもろ家のは
わりさうなきれし　昇源の衣は太はやく
言今ものおはれはつくさしとよみてゆうすま
ゆてし　一つるえ毎ともりて　朝粥のさて
いはるとくは商量するもすまるいな常に
内にくとすへきけしとさり候　朝粥の綾乃と
とたり　一つり皆　言はたし　一はやも

多く弄　候ハ多の歌よみし　一　つまし多
やうやく花よりて秋のはじめのしるしとも
覚ゆく時こそのちの世をつまにこそ
弄ある人の中にも歌よむ事をすべて人のもし
一　候やうは　おもしろしきも　一　つまさも
篤よもし　一　月日さえり　世のつくれゆる
ゝ歳月をまへりし　一　候もうすら　往の
花にいりて餅し玉く　一　つまくとまれて
素如斯にし太鼓すさまじきをまつとまれ
てしまう　一　候やくそしたかし

一　候くも不　遠物不　内裏仙洞よわり
一　つかより　かろかりやせ　一　候はやうす　不常
神書ゟ候しうすといふるまし　一　つかうしさ
陰陽とも　一　候不可　被仕天后或文
不可申しとも　一　家候まこと文　一　候は之候の内裏ふ
世の事よみえはるくときへていつの月等の
節より物ありうるりうしきし　花や色
よみの言くと作する八字にわりしかし作
文選　古翁の織云　蜂霰蠍同於舎根積と
一　つくとあうしとく人は　唱和　小児の乳とも

一月のせいひかり　禁中も冷泉院の月も
みなひとつかげなれど　深山の宿の松のうちにて
御ことは早下如一　一　何のこと　玉はれ
ましの御の深源氏わかくつれつれの時の見る
一　つまくさ　昔みちは蟬しかことは人のく
まうらひけりして　一　つなりちゐとつれよ
六条院有礼の事にも　一　ごりわつつ
妻し其の花しやみなしとふとつてこと
一　つりの人にも　史記曰季札之初使北過徐君
徐君好季札剣　口弗敢言　季札心知之　為使上國
未獻　還至徐　徐君已死　於是乃解其宝剣　繫之
徐君冢樹而去　従者曰　徐君已死　尚誰予乎
季子曰　不然　始吾心已許之　豈以死倍吾心
乎　呉世家　一　つくはうし　かりすき
めもとろ気のこゝろよわりしゆゑて　一　ゆすさ
礼有し　一　つまかり　猶し　一　月まうに見
なほ彼才十六月とふてしき　帯とつて見む
中々人のもとかれは八帝別とを
一　つまの人まろく　猶　重ねるかれはそのつき
みえ人とは中将かなるなりとたは将まうて人をも

よりて禄のつくし　一ねはん山と涅槃は釈迦
の前日みなもまされいつはふとそり
一ねまちの夕月夜　ねまちは十九日比
とかくてやうやうに臥れ侍るは七日の夕月夜
よゐ阿仏記にも七日の月をとゐ一日比よ夕月
夜といへり　一月と云は八日　薬師の縁日也

ね

一母度　二経三度よりまゐる夜のつとしてまゐる霜
のむまにも云　経放へし　一ねらも　縁人のまて
まゐらせとなし　一ねよもよ　ねむ姫ねさ

まれもねくらむして　一ね(ぶと)れ経はねまくよ中
河そのまゝ　一ねひれて　昆のむらぬ過
一ね(ふしぞ)ねむら　まきねくいに そりとし我へ
まつれは寿つはゐてもつとの道
つまの枕ゆかくとみへゐる　一ね(ぶ)の人年
のとりなるへし　一母(さま)別面　新しの毎別面
いとちに式まえてさる夜又別面し　一部今乃
世まも隠又気白面すてまた別面の高よても
一念佛　乱て称称に誓　観を暮歌縁は
一(名会)母房のさつし　秦盤すし　一ねさしまて

一 鶏　辛亥九月六癸日人元帝天此月
自列をいりあはせし此星一神とす元日子日も
十節記曰正月子日出岳遥望四方得陰陽気
除煩悩之術　一 ねのひとて　祝言ねかひこと也
又ねのひのあそびとす　一 子日うたに（ほかるる上）　まつの葉も
正月のはつね日祝例多之　一 ねのひとは　祝言を
すへるよそほひ花橘ことのはの事おほし　ねのひは
めでたきことすへし　一 若菜はやかてやよひりて
（以）又後は京辰の業平卿ト申し是のりと
みしとて諸すてのち京極殿家

よはひをつゝしけり元良のみこは数え
一 ねのひあそびに（乾）若菜のりまゐらせて
の後は行幸あれはよろこひ申へしねのひ
もとの心は口伝あるまじき事なのなり
つまそてつひにこの地かゝみのさえ（弄）ねのひ
えいはよみなきしし草とうひさるや
し文略をいさかひしや　一 今日より万
年の齢にまでも皆捨難き心葉向両
方　一 ねのこ日餅　子は宮のつまこ日餅とし
かゝりてみるの餅とかいまいりて云　三日

のつよくとみことをあらす

な

一なよくとは菜也　やつうし　或はうちひつ
同じくならひ葉のなし　一なよしの
ものし　一内侍のすけ　典侍　掌侍
翁のしのはらは御簾しろくなる
一なきんのすみの雨のあかん　やうひのと
よくなり富士山ならやうひあひて
かなしとかりてかり玄宗ならたきと
いん所かれて文武は翁はわかれし

かくの様し　一中ゝ　こそとあるせ
給ふ云わくそいう　一なかめしう
翁媚生　祝　なるかくまこのかわり嬌ん
と云母御前の子めでし人生み宮と京ん
めく云いきみなるくしうなるのあはむ
一なすひ　しなるさし　一なつさい　なまし
つまやし　昭幽　一なりし　香礼
一なるらしりかりてかくこう給　女様とは
清原なかの六人なる人みな扇し　河原の東
の庭は御門跡らけかなる川しりかりて

ゆかへむかひて草鞋しらふし 礼籠し
一 おしいり 暴し 又 やつし 一 おふくれ御
うすのきぬ しまくとんまらをは 時雨さし
うゐ人すれゝ こゝろもち物かたとまり
西人 殺定 一 おなく 花 おなくとへりの
おさかりもりん 一 かなつせ みんとも此下
一 かつ まんとも しんへしくすりとうふ
一 あつとさし 一 あ御つ有 すつしとも此下
西衣し さうめさと晴しそすて りうかし
出別 いそう つゝきよすへて そへてふれのし

一 あまこつ やうこうありし 一 きのこよ 大宮し
とらなし 十ふすもねとし 一 御世みあり
三夜 御やう中きにし 又 大ふつしら
ゆかしも 一 まゐり やつうよもし
一 まゐりくろく 媚心 一 まゐりし 太宮御つ
よしあうちふしいかのしまもみまゐらし
わきしとよするようや 一 まいてとうち
とさゆしみ まてうつとられさしきいらん
まつさしとめさ女れとさへし 一 おり祢うらよ
又ゆうたり 円書しり居ろ居字の四季人ぬ

くわうくしゆへしゆりとせうしこうし 二条院
もゝ内ちかきつゝのまや天一神とこり
中神ハ中央の神也 其神あ流し
一 中川みちあり 今乃京極川なり
一 すきのしも 在しきん下し三方くも
一 みけしきし 一 あよこも 兵衛へとあれ
ふるさしせ九あきさ行や 一 あふくそうん
一 うちゝち りのさとくのさゑや
一 紀ふ紀ん人つくさて かへまるゝ上
まうゐこうしかりをよあた分別とつゝ

一 あやしろは うちへのもてこゝけうく
こうし 一 すとしく 上れつまとすき
さりて日ハ 一 すきもれかくつくしすきの
すきなるさ けやうさもの中し
一 ありふし 農しつうのま 一 なまなう
い今つし行きうへゝんに三 天地須え観
あ面未みそくしころらのか世み時地乃く
つさ今くとちりて 神とし 一 あふうし乃院
うんしやうさこすとハうらし 河原院のうし
一 あるゐあん 克 宮の一ちくよ内些みゆるを

壽くの江行成ハ名をハいろんかり君謡と
よまうしよりのまさしよしのちう
行成さうしよくとつれてすのつはや
さつうし滝口みえよのまうてこ
一 宮方のくらゐ世尊寺殿れこし武蔵守の
松原と定信とよりも後付毛のまさりて
正月とよりて川しむ勅使かりしのまへ
判せうのこし 一 かふすぬのなみり
うけまつぬのて 一 すくとより 大夫のまき
華開定氏ますのよしもをこし 一[三] かくらくも

うろくの世と路のをりして出路やうな
のせこハ世ハよし 一 あふうしの鹿[illegible]
恵心僧都山の僧都とうにす 世尊寺物語見
一 あふしちさま 冨士に封じて云源の
きもうや 一 きゝけかさへしそのゆかい
物人といのこし 一 あふりけくさよ 定まる
古今の序よまする人の歌とき
一 あまるのかみつこともすみ 千まつ路い
さりせん源氏ハ物語かいすくとさうぬ
ままものう路てすく世ますふそとも

つまとかさねもし　一まへしろとこえ郡
をねとかきさこうは　まへしこいむら
のしかきこうも　きぬしつけかさしかつい
しもへさかし春のこうも同かり
一かさねのすち　中にのすちのはかまし
一かいせうはう　内教坊　せうい大月まてあく
とりしもやふ着とうり女房ゆ三く
みまひてもす女下とうり今せりかり
よふ下いもしをはしや　一内ゆ下　これを
かさね女房とりのかみをし　内裏ニ三点

三祢御しもまて　一まゐしもうらおし
侍まぬとうものおくおやぬへし
一なかるいちうさきうさ業のつかぬきに
裏ハのうしうさいうてかゐや　一すそしも
うしく　表裏　同文のきもし　同色
花うまいつもとやうちいこあくとてし　けすそし
いつもやらのうおり同衣のうとうや
一七日九まうなまて　白きいろのまや
天正十年正月七日　御白かまはき
みかの実
一まへぬもて　退御　五月此日深紅に御也

初つくし見やうのこと返の事と申事より
じやうの謡の事と初心中ひとしく世阿月
謡中返流家〻 一 名ちかきうちひ ひとつの
名所ある節には言葉語る也言葉すなはち
申さしや下の節なしれまし
一 曲舞之事 正二三月中に謡の事まて人と
ありて謡く心見り謡やうの事よりかつて又弁
拍柄并文袍と云事 謡元謡曲申谷て謡い
謡るなり 一 音のかはりにつ 十の謡節
よ用も中ちくきかいは言葉は一とりせうもてすも

八九十と申も少しあるやの調子とくたくし此外流の流と
一より節ってうらとし中也とくいお拍子の合
中も調子としてこの物語は 一 中段いうとや
内ゆる申中節中段いうふのしくいてあつまて
節とをあて三の字をしりくしいふくへ節のうちよ
よやうり卿流句の 一 音文の謡の事 音文の謡
ゆらんこかいの言の心得し先例也多く音曲之人
変して花の言んの望いれは三 拍子秘家
秘有元意申也袖し音曲の花言筋秘
よしれ二 三 初音曲元言あるしまし内撰歸

御延長四年二月新しく又菩提寺東寺の御堂
天暦三三十二月の比称人つりよ于堂上
の帝ハおりさゝく 一ろくとわりよ 叶まいは
しとし 一すけさうひ むの出かりとはむ
よしむりかりは右御を供して法隆にまする
むいとのの言くと云誦してトりのつまりは
一言れのりそて 此堂の所とこ三月に束受
兵しるのれまりのえもいさいこまやとした
の源次よりうさまし ひそのれさすをは
一言れのりの接しさりにしりてなへし

極經寺の緒とり寺定子皇后の御葉よ
御堂男白大臣下さるとは着しますへ
よら 一すくとゐれやれ 花園城との
同二と東部し入給しと申すり 未常
一すけさうてわりの 以年の内さうへ
法那ておの万宋寺とかきまておる城へ
し給やしふれ 一内ふ良のよりの結ぬ
花ふ用を彼所さまりて西寺城給へ入奉
てくりの由ふ良よ城給くつりしハ極楽
にまいらしりくよやりて極樂にのえ

こゝろわ里もとしけり　織ハりしとて錦仕
后とすへし　牽　あさまりて　一　動静と
ハ后弟の大臣也　張吾開后弟の女門
大下れ當くそうつし　一　すりれ上下りハ
四門后しわりそくすの上下りとそうり
牽后大臣ハ代も東より吾段大臣しもなり
多さし　一　東ふもれありく　花　作女よ
八十将氣ハ東ハしてる曲折の人　四家と
りもて気向して解深すりよわりにね営
当分ものゝ内例し　一　女房　女房女房

とのせしも毎月ありしや其日の女房遺
すみ女房といふてしものり京中にて流
国ともいふりけりといふもあまりれ守
りまあてこうすり作まし　一　七日のありたり
しひ　尋常の礼ありや　或ハ七日ちよとま
美濃人もあるへし　一　女人世のわかれ　せる
のとゆりもさひても男女れまうる
とやうと承候まゝ女人ハ今もちうひしと
と謂りいさみ給ひんとのちろうなり
一　かなさし　内侍所ことりゆかしやうすれり

しやうしのたてかけしかはしわかれのかり　二句
さし　一句　なるやうやとなるやう　二句
かるゐんともやみかれ　三句　紅衣
とうす弄不詳なし　詞かんかへし
一　なつきしをは中の句に障るなし　一　すさし
あらそひなきれて　大節すて直衣ゆるさ
はりかわらふや宗祇序寺記　如意院相国
いる衣とゆるされもして　無高内とも　弄　二句
紫衣なとはいろゆるされては詞のゆるし出
きそゆるされし　一　禅心院　一　中丸みる

かしいの中にわらえし　一　まこのかやよ
御会乃力役先師也有次文氷之用
一　まてしこ丸わするゝ　みてしはかすてにも
うしなし　けしの花は卯のむつまとをや
一　まくらなしときこぬ　螢丸かすはるの
ひるつすは淡すしや　一　すてしにぬまとも
のよしかりの糸の文はすてしのさしくる
とらなる衣し松はすとしきしはよりる
たまるすし　一　ちはすり堂すもとしきい
こきめ称し　一　霞の月すさ也る　酒家の

ちらし漢字あれは物よみ物の中もあり
さ時は文字もかゝし　一すゝりのふた　蓋と云
一すゝり　也云し　長手紙字也とも云
のは紙を書くいたり紙も三十字の文字紙
云とゆるへし　一内侍のとも仍書へく
表内まて内侍の局なとゝりつかわり
一内侍所は禁中にしれる　内侍は目の中
よ尚侍典侍掌侍女官は四等也ほかり
宮月よい女官とも内侍のうへの御方へ
まいらつし　一おしてく　禁中のとさは

名しくみゆて　一すゝ千のうらへ
うらは古のくうらのまし　一すゝ硯のうらは
おりや中しそくすうれ手くて
くしくつや　一すをけうや紙光女
こゝしくてわひとつ云もあらとく
一みれすいまし水は真清水し　一すゝの
八重桜云ひるの水とつさうやれ水とも云
小井せいさは小川とも云もやり水ちる
わさくてかくしとそし　一すはしきこよ
人のまいろそする　花鳥常おくのうち

てまはりつまくゆかしきまてらう
きよめこといふくまはいなとしせう
一　内親王　准后　女院已　親王　宮下まて
うえすゝや　一　勅令旨　一　自餘は男の宮　子姫
院御位時は名衛親王未有名　唐猿の腕　白石也
子姫は小宮姫宮姫は云ますとそのてと
今の末明石通ろうさかりをきこと
一　手すゝら　御のかゝ女王みとよのるをそそ
つかりとみ宮まていすゝれたからまやせさ
一　あまりけさの御宮よりみえまちれいてまつるや

しよのしや　一　まいけり　内親王
一　まさとの行　狩衣　一　すんちうちくみちまいけ
慈と柳ましてまさかしのさくをし
女ましまのとし　不天の女の丈よ川らと
まれとかりくつし　一　まさいらん　参前也
原文行御の武　出拂し　云唐治将以下一員
御採みと　御書　同行者　こまれ宮司寫中ある前帯
て業行まて入御し堂まる参前の文目のこ
御束不脱て兼慈饗応　参場は行場の時まで
一　うらわらし　またくも　参くる事のとことをりまや也

一きゆうくん　きゆう細もあり

一たふそりそ　かへしのことゝもあり

しうきゆへことて祥しからうへん

一中やとり　南殿下向の人守中や

とりとん　一すさましうち　史記同巻

恵帝崩きと太后哭泣不下　呂后本紀

一なみしの手にて　了つ含はなるへし

一あはなりかと　涅槃経　汚合師同じ語

羽毛常見生蔵は生蔵三巳常蔵みえ　宮ゑ

高あゐ水は如及飢ゆるは含むなりとて

けかやすりしうてはなおかうて見は南本金

ゑは天めてし　一まうしき　八月はありもしむ

文よりすれはもとくなともあり来ける

七月みゆる　一なかしのみ　雨更后府

以るまれは文なかねとてみとめと更后

文后庭家景物作居舟記るに赤延小児称出

約数似まして印と書く字を葛洲兒與挨拶

曲小児醒　會屋景武し見し　扱小流本曲

一まゆしりと

まあわらて我は京官みちらりく以後換草

まあとすりかや我はちりしうて無き月って

もわりたるらしく糸芝の中をわくる人あり
あゆとらや　一あつうと　中ひとつゑて
も責かりきられろきつしくて
一すてきて　武者いさひ　一すそのそれ
めとるのひまようりてもひつまようし
しろをよ成られ　一あうこりの　六千ケ日
の猿よつてや　一中よつゆく　大磨鶴
心想若能中腸の毛状云　良氏文集
一なとくねるまりわすれ　松風室のそと
氣くとみてゐる　一京ありゐ　沈修紀　積川

惠心僧　浮雲須紀ようて　一竹かれたる
よ　法花経に　紅のさまに緣より出ると
後成因果巻第四
ら
一らうかむ　いとすきよのとおれさ
おもくとミうや　一らう由う　云し
いさりのし　一らうつき　ららやさかさ
一らうつる　扇かし　一らのくし　鹿青浪や
一らくしう　良くすつうやあなさよ
やつきろんら　らつききゆかり

一らくやうわう　瀧廊鶯蔟槃之砌に
葉桐　白氏文集　一らんさう　乱戸　らさ
うとかきるかむしりりらん乃らとを頌
一らふの京れ　らんのむし　紙衣ゐもと
うき月や　鶯苑しかもそ　一らうん　螺鈿
りくとなりてつきなや　鈿さ　螺貝とる己
一らりしとを　菓子なしりうしのなり
墨子　撰子　しろさのちよつらくとゆく
とうよりのし　一らうろうなり　廊下や
一らしも　花乳し　一らうし結　紙すなかり

一やらううさ　ううれも　一らうう　牢籠
む
一むおかるとし　むしのふさうりるとも
一むしのうるりくをうすくへて　文衣のゆ也
ぬるく嬉くつねて　素月しえへとゆかり
一むつひ　むつひしくちすのとさし　一むさん
朝毛のおさきれとせすさ　朝毛ハ一本
しりかなもそハウ京りし　人名なれわうるを
ハ人名といふん　卒京とさし　おせさハ母より
朝凱とあらさしとる和箔のらし　一むすひつる

源氏とありてひのうれこゝろをつくとゝろくさ業ハ
之腋の附れりとりひのゑしわきれハ又紙
ろう十六と源氏のゆうらきうりとや男女のりと
りひ業れハしらで紙より也
一ひつじ ひつじさる 一ひきま 五下
一ひつし ひつしさるや 親言
一ひのまつさとう 多かれの用とのうす
一ひつへ 一ひくしく 足くし
一ひきい 戸見すこの前 一ひくはまる
おゝうきやし 蠢 貪 泉 一ひつりて

ひつつしし 一ひつつれて さ乃乃
ひくきもし 一ひんよ 壬蓋
一ひへ ゆかし 一ひくしうね 泉心
ねよりあそてつ又か乃あすく 乃也 乃物
の棟梁すゝぬし 一ひりしきもんたん
らゑ 三物の前秋成せようひ後し
よし 三よれ明朝ハ秋わすへらの乃也
一ひさわう 貪 一ひう 歩路すとくよう
寛平法皇河原の院の時 融公の霊
ひとつやとくとゝゆうせんとすり時も海い

ほとゝきすの我ハ五月よりの歌へハ詠ぬとなり
となり　一 しのふ（わか紫）の戸　室の戸　一 しのふ
ゆかりのいつくし女　仲忠卿の母也　十八になりて
父母におくれてわひしくはまちますしとて
ほとて　世をふるもわひしさにたへ浅茅よ
りすみ侍人をそこと云　一 蓬のもとくと
それ　蓬ハわくるてふなりのやとくる
思ハ人のしらんわひしさよりぬるし
一 ひとしきひ　見るまされぬるさま
さうらひ給し　一 梅の花の匂ひしとみる
つゐのすみかとみすて　明石の上とてハ
ちうき丸山しとらふ明石よりてハ名こそ
うふふかり寿風信のうてみなのかたさりをとゝ
すかの琴とて東遷するは風信ハ別のこと
やとこと梅の花丸しとみきの丸みをふ
うとひめと詠むらのうへとうひとうれを
ふもし　三笠乃山いつる月出たる人いつし
ましらさきれハそへて詠うちみなとい
つまりそのかく　一 ひさんのさうつかの
ますつそりかし　梅の花ハ面白すくうつろ

すもじやかさなるハ細かりよきものゑすゑるの
も花ハおりてしらくらしくときこゆると
いふも　一こうばい端の事　花咲しハ乙女座て
てよきの馬場よりさ大月乃騎射の時申か
めれ其荘すらるし　かりの素太日みるさい
わ乃律けて一年と来へとしたのまて
ちとの乙きれわりをもさらし　一紫のきも
ゆう　紫れもしきよかしひとらる
一ひもんめうへ名前す　拜き紺の袍ハ定き
くゑらハ五緒文ハつるの袍れもし四云

文のうらあり三位兼付　一管　蜀云文き緑服き
ハ云みの屋くと見し　一ひらひら　也比のこと
一ひもんめ申きそ　今渋氏云宗住へし納言
一ひとや　のおきふらしらみすら　蒼黄褐色
ゑみかよはうしんへ今きり紛けの時よかりのの
わくりのむしさ色よとしまりけきれてむさや
のおもくりすくなくさうのもきき　そ前へんして
つらりくろつ　評若葉醍時重攻一第一萬
色意林　今もハ口論し物しもたうももて
はりも論しよ今人部しら事まつらう

語は踈き人世のやうの語とゆるしたまふ
られけるをまはすへからすや　一　むかしより
かしこき賢人のとめるはまれなり　蒙求と
初くすもれとしるしや　一　もろこし　許由
一　むすひつるとことくしも史記曰不屈
下父字君　漢書曰維為青苑令
類文選曰東方朔林尾必推之行高抜氣人
也丸し　星氣録　一　むしろ　荒
文　毋いこのみこ中野マ孟明親王山元生
不井川け観を亡ゐのふ代毋素の親不とあり

一　夜のあたりなきをひとつかみのわら
ゆさゝへをりん日さゝりんのとりのま
らさうちとつきのかこしるしつて
こ藁し　こさ束のうくハりうきわけて
ゆふへにハこれにふしあしたにはおさめ
くゝゆつゝし　一　藁の束　むうハ源
のゝむとゝし　蒙児　一りゆへのゝし
一　むのとまくさゝゝ　ひとつさうゝて
一　もろこしの人ハ　これをいみしと思へはこそ
とや　日本紀　日本武尊東夷征時也

たくとつまりよりわかるゝいかにもちくとけりまし
一じうちらり狂言の妄語のことはの縁なる
又ハ含此之よりうこと経母のひとつよりて
とらりま始しや一字のうちふりあらは
し 花雅云太則ぞ国経郁下の家の給
けるか年定文のむかひてきこしは給りて
り来ねて給りけりけるのさしらなは
よ綴石段石隔ても一心くれて給し安れハ居
いしや 一字千金とはかことは
うきんとい芸のゆりと云さこつけて

うきくしわしりうてとハ冥先家か和をも
たと給はらせらハ一字の御徳ぞおもち
て花山院の御ハ役為段此三のうち
御代ハいかさ役大臣すれいたまりあり
て修月すて御方をされハ御堂文殿ておもう
と云宅のむくの御門とも給ふられさミて院
日るゝと宮されるかゝさしかと一字千金の宅
よ云ゐし前星して云下ても家綱をも
ゆりしや一字もやすらかなりもとは
花は阿の天皇とれかよりたりうつくらしい

て忠信をもむねとするよしをいへり
一むさうの人者 三年の喪といへどもそれは君父の
なるといへども天下のむさう
わうひとも云也 一むさうの物語しるし
文字のならひを 記 七ろく軍平よりくはしく以補
かならず称をあへとられしことも門下
一むそみち世しも 年寄よりいふことをしるし
一むし人のゆゑにあり むつかしき人の内儀にあり
てのちのむし人帰して 宮方ともいふ其家の
なれども給ふべし 一むまやのなるを

い南河中にてすの名とさゝ 一むつかしき人を
わかづらとそいふ 一 宗書云 努勤也
感思祈 一むしんの女房 無心
一むつかしき世にはあやい 伊勢物語の業平の
二条の后をぬすみて出しよりいふなるや
一むつかしき物語も さる女房のとと女
し 一 無宮子 河考 無言なる物語家
しのさた名御晩 宮将正出而十三子 晋言
一むなしく て日明のむね御殿よ
数りなく中にはなかしとや 一むなしき

すき候ことのはをたとへていふなり

一説しけしといへり これ和歌はよろつの事をいふなり

しけきのことはともしくのことくの明らかなりと今の義と

いふ人ことしこゝろ 一説しけしといへりいはゆる人

うことものつかり 漢武帝の葉仲君書ま

人臭語は經石 一説ハ別とおほしらく

うるのくと歌書聚是同語のいふ人の事は

ておもうもけつよ後母みさゆよこうされ

けきいその出るれうるのことひよりもてつ

のうにしと人眼し 一説いは 生田川の花よ

西人そこなん 大和歌とは 一説やまとうたと

すいもし我朝にハ青陽支辰日辰にすへ

ものを全くいふ久以陰陽行春さく程し

まつ年月の後ならて ゆきのはしめの集

為りして見よすれは其見よとつゝよ

後ならうつゝをけつとも智証大師

よ顕識しぬさりんしやまとうたとす

わりてこ所にわかち天のやうにかつて治

まさりこは後かのことくまぬかれこ

君ならのはしもみこんし 一説にはもうなの

うら絵のうへに御かけける
う
一小人（こうつかい） 家人しゆんくと申し所を
中納言しけ人のへて 一ちらさわく
無足衆家となし 一らけわうそのこと
りうよわやしきわくとつて手御うち
指しわさ家のさりうんへさるよ指くとお寺
てうしつてとうり 義 村うの御付 宮まいり家
のめいしと春つかの中文とゆめ様くその
わりまえおゆふくのくるうしとおほえ

宿とまれちくしゆくしくとふりきて迎
むかへのきさめみなすそゑへちしこもり
一よへつかい 對の屋すそて家まいて庭くと
給とさし 又中文すうりおりをおりり
随身家の二弓とこの御蔵まつめすり
ひのゆさみちらの二弓くとらみ扇とは
やうつり 一御わさら 御簾しけめ絵よ御
とわるいそら御簾のうしろおりまて
その家み御のこしまこ 一うつうう
御 新儀のりまうさこし 一まうつしまされい

かゝりし乗の字し 一 たとえつりさ 典侍
まそ宮え つらくしりたる 手跡 宮主とある
てまのりてまいまてつまいたし乃くたる乗
まうみ一くしり宮主と付そして名の子
すかしさてまいとのゐとみしをさのくよ
一 ぬめのしやたとの月い見まゐらせて戻りし
一 よもむくもりしさ 蔵人すまりさし
一 うふてうぬのつさ 侍とわまりかゝまい
さらくゝんのえうんとたりまとはおなく
ていつきんぬめのつさとや 一 宮ぬ御隙門の

ゆいまし 寛平遺誡曰 如善之人少將
是者上 蔵中是か 如女とりて 消息文
宮の消いかしとよういそり少のあまいり
られして付まいさせのさし 故いふ侍
てとすましうつまにうつりと
一 よきつうまし まゐらし 一 ゆきうりて
諾 定晩 御局のゐ 一人れ 命婦 内侍 命婦
よそをき内裏にたこうすのくと内命婦しひされ上
の命婦しさし 外命婦は陛下の妻よ媛よと命や
一 ようくのまちて ひよう 内裏てのまゐる

くしまて 一しらつゆ やそてうしの
まくらに 一しら玉 えしわかそでに
なり又 源氏をも本とすへし
一かけろふ 蜻蛉の人とふ 歌の
一うつせみ 源氏にし 河海 蜻蛉 一うつせみ
人のよのはかなきことをうつせみ人かの墨
とみえのうつせみとも月にかふらて
しほ月のなものやうくを 一うつせみ
比翼連理のかし 一かへるに人名の人物
一うつせみうつせみ 人のかたみはてまし

ありあけのみかけし 一かへすかへす 源氏
すさまじくしられしとかやうせ
一はかなきゆめ 源氏蜻蛉日記の歌
のこりをしかりけむ 一あはれし
神なりや 一うきて うつてこし
一うつせみ かやうすうとこし
一うきて しかりしこそまぬれとも
一うつせみの すとうくしはやまぬれぬまも
いろとりてよそり 蛻し人うつは蝉のう
まくらに 一うつせみのよ 源氏集也

源氏の物語を書きしと紫の物語とも家
の集とも云ひしより紫式部とは云ひし
一 なむたうらい 優婆塞は信施の事を
よみて 南無当来の導師とおかむ也
て五十六億七千万歳してこの世に出世ま
てのちきりをかけてたのみし 一 うはそく
すきしへと遠くして仏につかへし俗
ようしをかきてゐる中に云也 一 らうら　見
傍 夕かほを源氏より家をまうさし
ふとかくし 一 たとへは 夕かほ丸の中

契りし世々よりも也 一 ?のちの世
むすほれ世をし 一 ?きん出れ ?んせ
いかひいきれとくまゐり 一 あさせには
つま 居君かれはくもつてをりぬるなれ
一 ?かうさしなし 女居人ともひまゆ家
詞し 一 ?らき 御おおわりたうのま
一 この人形はかしすゑみなかりのへてあみれ
らようつきさらつここうさとさうすれは
与さのはなつてこえいかなうにほかれ
一 さ?はかしけるに 晩世しのかふまくとほり

一うつとのまつ　源氏のうへとされつゝ

つまのちうし　一うちかりて　源氏の

うへうちのわかまき也　一いまこさま

ひんかしのたいのゆきし　一御すゝ女房人　紀　宮

女房人といふ事は　いまされと女房人は宮女

しりもわかれさの女房し　一きんかうさん

紀　也いふ中の文字の東の方とわりあります

御所みなまいりてはよし　一うちふ　現之

手紙のもん

一ふみかき　ことのは上皇ゑ京よりてらす

御人こゝしるかふ名のりとてかへり候

のすみ物まきとやとらうかや

一ふ御文さるのう　その人の声といふなる

御さましさ御より　のまる　女房の中ことうし

うちまつめのまへて　一けさりん女房

のちの段　紀　今京の事は女　いふわれの事とよら

もとはおそてこそのもつはさらそれより

宮まるれしもれつきてはこのもふる

しもしらへの方といてさのさる

さま

一きんつる院　仙　京極院は準和乃韻文し

御月只をよ人に香しまての称

一 うき世にて うつゝの世よりのかれつゝ
しのふのいつはりし 一 それ〳〵にあはれ
人 道通の為へ 中川のきよき才能よ
のあるまし 叙爵にくらさは深窓にゐる
てまつりの花をまつりける 一 御所の前
てうつはりありさらんやうに 定めて
明月記云 為卿 融地 電光 地震云々
一 その中にいつさまれ もいはれ大にかまへける
と御代をさとくつまに神の御生世からのかたを
まりしとおもひ入なのあまりおほすくつけ

涸し 一 きわめ上さ神の御前宮の御神去
つゝ 楼の小戸に随縁うつし出去る
神なるふしりて御よせ神とつの奉行
又御中みつさまよ 新しくさて まつりし
らてわれたつまさくも神とつもんされ
遠わきりさし 八百余いつきのとし
一 御かのあそさてみれり 花も御守く方さう
やさひとりしみのこよなきつさ
らくドいくらかん よつうし
一 らすくせらひ 村の信れこれのいまの

ひとのあられ事　一 こうつものゝまれし　我之宿
うくしいわりみらのしくとみえし
一 こと枕や　清書といふみなしうつ
一 くのさなみこさゝすさ　末の物也漏
も給しまて消息を書し　一 このもし人
とめうふとまし　一 ぐつわ　めうこうし
一 くの女房まへつまて　よの女房といふ也
御常御所ゟし　衆ハ左右人ハ右を書
一 じゆの柱し地ありしたる　我　文選よ　馬蘭柱と
かきて　しるし柱とつまし御所ゟ下絹ハるの

よきのくゆるとすくとつゝらる
つかさし　されつゝ書ありの柱とよめ
まいしハ言りさく人いつみの書とすまゝ人
の飛鳥人　よみうらしく中納言　寛と黒の
よみうらしく見ゆる眼し　一 あきらか　よすみさ
ひさてらし　一 くへの女房　畢　ゆまらの
まうすくとうつれぬ哀とうて河漢しを
うき合よや　一 部　官人の事うするハ左府
しりのゆし　一 まのさらう　畢　まひ祠
御史大夫歳おうしまさぬまくとむつまし

あしよしは　一字のしつし　四季以後の
ほとゝきすはなにとやいまはいはしとかたうへし
一 ふさ侍（ふさゐてう）と　ふさ侍は桐壺の子なり
一 うきのまくら　うきもすきされ
一 うらこれ　おはすやうこそ　一 うちはらへ
名をのみいひとかうかうかるへし　一 よすか（ゆかりの）
うらり　柳細葉勝池如煙　文集
一 うつせき（ゆふ）　非采（菜）人　一 うつりの藤氏（藤原氏）
藤氏をよりは一世源氏は人のみならすそのかみ后宮や
ゆかりの女御は藤原の生まれて一世は源氏

そのなおまたいはた人かけぬる二人
またあらはれは一人は宮の大臣の娘一人は時
のみかとの女御の后腹の女二のみや
それ腹の名をかほるとて姉（あね）
光る源氏の子をいはせ大よそなりて
時のみかとのかとてこそつかの
はなえしほうつくしてまた大臣の子孫
に源氏をたてゝ入は出家してひとりて
とみなるとも　一 松（まつ）松　松柏　もとく
いはゝたゝいろしのはま人の子へこそも

すゆへし
一 うそふきつ うかりしき
一 うすやう 紫のうすやう 一 弁さし
弁当し ありなし 行章に宮となへより
一 しつく やそしてなむし しらつも同なし
一 たそのらんはとりの水 義和の時太過は
津は みちの水のさまは地小さつまり渡おお
絶して こそあへすしき 一 鶯の声
しや 鶯のなくは野曲は 見し わかる
い 墨は ややみてそうつれりしわかれし
はもわくへし 一 鶯のねさは 琵琶上に落

琵の曲 はりや 一 かすさゆるて うす
花田のるとしやうさしうとせう纔
しや 花白さゆうしいふるのさのや
払し 以経終し 一
一 うろのれしの士 宇多法師 わえんは名
うきまのいて せむすとの人田は付くとま
おりて院の御門 清氏は御言へ御てうき
年とそけときりとめ 一 うすまん うすまき
一 用まかゆかや すりい ゆまて 池生の時いち
みしかうう年まいのし 御多へし

一 あさ下 ふしの衣にゆくへしらぬそて 深 位なる
位か位殺袍也 一 うつのさわにさる
しかきの御方ハ位さる出て御袍みし
うるみなるうちはし 一 うちまれなし
まさなくハともさしるのまなかれ
一 久ちり うき絹のよか 御裏不見也と 形見にうら
ちふ ゆかりありける袖をこもへりとハ
不可付て若ゆへまやう絹のよ 見ゆる
一 手 うつりかし みさしきたるハまてもかせ
そつまかりしてるの意のそて作 ゆかるや

ゆめとハ云の嵐戸ものくとなりせけり
一 みすてをきて 今案九云 至若父母未能一年
一 宿 こころせけれハ ゆるされんハりのなれん
たかくとりなされ 一 手 うへてくしゆるの時
思ひとらぬ人はゆるされし ハ二条院で
ハ六条院也 一 紅葉 もつてと 横向のゆし
一 手習 たけすみ かいすみ 深くし
一 竹川 ふてのすさみ 常也誘り具引下草文
指畄出水遣 一 ちくくのよ也 手ハ引
地曲ハ呂の曲也 一 手習 ちらずてさ ハ 憐鶯

まのことゝも給へりけりみこの世野みよ
りよせうへりけるみゆる野のまし　一こよしと
いふへしとわる詞に世にはしらるゝ詞よ
わすれて　一おさ給の　むつめすへく下
しけのよくと云り　一よつき　給ふの
ときるくとそへり　一うきせん　福寿いふ君
してもさきうゑをてあやうしみすれ
もし　一うつら　持統天皇三年正月
皇朝百回来まし乙卯大学寮献卯杖八十
枚卯槌のさほうつえと同し年中の無氣

とあるのこねく正月初卯年中行事に出
一ゆき文　内宴　一きぬねり　内舎人と云
ほ給のよし　一ぶつを　ふつうのひやり
一ましめと　すきりのそひとゝりの世上
よわきみをもわかいふすゝき
さま人もかくれはみなひわる
と哭定しみなしや　一うさの合
して　器米をはらへし
の
一うちみまき　七日くのあつひ

一　みなさこらく　八月也の名に見えし
一　のりの師（ここち）　此の師　三国流也乃かゆひし
一　つきのうけ（たられ）　わかれつましつけハ地のうけ遠
一　みなりのまりひさき（ここ生）　りまちそくきの
しらや　一　のちの世のねかひ住ふのき
ここゆて　狂案のちんせんしの井れなし
一　のちしさんしく　めて少室の以後を
好て此家ハ在かり流を好てしれと
一　のまちう　二月ともらしまして　るとけら
をそらつらくとみかりゆきまそり　正二月のち
まさしちく三月まて正月し以後三月
前後の出流れ御定月そ尤又近し
一　みかりて乃世　わかりてのせつて同し
よ古れしや　一　のかりうし（きりたり）　其れ　三やを流
とみつく　旅と婦人りのとし
一　のかりうし（ここのり）　みかりうしハ前の以後れそく
好まてめきらし別在よつてせくと流さよ
しくとわりのまとみかり少やしれうそ
一　みのゆきのそわし（白らえ）　是らしとみつし礼記
しりをとわり　正月始りまでうちの方

星中月として金饗川へりに付夕宵左右
一みなみくも○さう　一のくもまちてしい合
まき　一なりやせうふのまなにし花のり
めうさめ久冬れしは　出文のゆきし花絶
以菊賭とん　一めく　寒のくもうちも
一なりのしと　漏絃に流水師とうつた
まえひしよきぬさき舟のすみく　かき向と
かさや　一める　出京し　一せうりや　冬を
せうまって　猿し　やとさん　一　のくも先
かくうそすへのん

く
一くつうきめさうを　内宮　宮　内右近衛府
寄月しは内宮くて花し行うを　は淡路
しりうつりのくとおさしはう下と
一くりおくうて　返屋のよし　額　に　額堂
一くりもめてうしとふくりのうとわおきも
に　山うしは花更衣以下つ月てうくせうる
よなき　猿　銀うよや
一こゝのよて　禁中は淑よくわて月てゆん
すうよ母衣わさらふの宮乃月はうかとこ

きせんとのかし　一　くれなゐや　右就圖書
ともなとわきは秋へ　花　くれなゐのあやと
あるは六条院にて　むらさきの上ならず　とは
かゝしくとありこそいはすにはゞかりの
ゆくふつまれあそし　かなやけれのかさぬ
とは狭衣宮自のえまくとふさしてんぞう
いはや源氏物いつかにゆうくと之てん
つらなみけりやきれ川にうとえのさう
ようつてたちや　一　くれなゐさ　寄せし　文脈
すみへとえし　くれなゐし書けあわり

一　くれなゐ　くれないありや　或いは腐などは遠
一　くれなゐけれ　くれなゐにしくれなゐ　よき
よのなかし　一　くさうひ　狭し　一　くれない
らん　くれなゐや　一　くさりの　草あし
積まの歌し　一　くろうさきまもしく　けれ
うかし　枝の実なかいつよしやうけは
ゆきかぎ身ゆ　射てけいふたけける
さいくらくやし　一　くびかそしあり
けうさよのくや　一　くまきすのみえし
くる我みきしたり　一　くちれかひて　神

まくらとかくしくし候し　一　くまつし
ありしかれしさてしれしと云やらし　くま
うき同　一　くさくし　石碑　一　みそらい
くちうくれるし　一　くさんうく　眷属し
きんさくとしむし　一　くらり　ようめの
くりもし　一　くんりん　執文　花　宣明紀
家隆卿菅原氏四十九日の執文は白桐之朝
つくさし見文粋生前少嘆静而未苑梅
檀之煙系尽蓑裳天人従遊立嘉日山鞍
文と同や　一　くらんしりとしくしらすりえよ

中くとるってし又候りの中ゆのゆのうしかく
岳哉人そうさ　一　禅門こふさんへし正月
又日の敏候し云　候の哉人ハ必当人やく
よくて候人候下の敏さうりくもし　松云竜
くりとしのつそしとつふ同りもしからりそ
云そうらうかくしと候し　一　そうつさく
印しこうの人りん出ても　一　くさうり　百
海ゑれをや　一　くうちとてくみしと
添さなりし早下の同しりくとこうふうさ
ハふとくしこうしみえも　一　くう候人いうの

くるまにしやくるまにしといふはうへにてよ
みしはるさしありさと　一くるまとつくるて
清涼殿にての女房くるまとかはしよけ
これもおなしくおりしさてありなり
一くるまや　とるへし　一くるまのいまう
牛のせし前転のしくと云　牛のあふさも
一くるまくし　くるま人也まくらそり
一くるまのこと　轂　老子曰　三十輻共一轂と
音居輻之正中而為輻之所湊也
一くゆくもとし　わかつのはかなくさつれ

まくらのうへしやさしはくるまとうし
一くるまさうそく　黒汗衫　女房おなしき　腋衣のあけし
一くんしうのしうぞく　黄草衣　黄衣し
腋衣あけしくるまうたせ　一つま木此名の
ことのかみよりまさし　一くりはつ　さき
ましくいふ実此のそけれしや源の
御くもつくるんとし　一くるまの車
腋衣の車し　檳榔車あくとよし　一くるまふり
まして　黒寄塞とさきれりの名
一宮爵とさうけ寸　源い御さいはさ

さて源君とてしらのつきせすしとゝりと
いふ源君とこゝし出来りとみえたりき
されは本位と申しくのちにて本院氏
へかりしとを源氏も源君せられしなよ
つまて此後のすくてとさたまへしとかへしかり
郡流の人とは必かく源君すなはし源名て
かかく流さいをかれぬるもわりなきいつ
みの後まにかりけりや源氏のちよ君は左近
ふ是いと用しかし菅原朝臣行平朝
臣是すゑのまくとりてさらしミと

くやかうしきまて　三条西家の説
一　車もかけず　牛とそへてかへ
とかうすし　一　らうのことおきてかれ此君
かうしのなき　くみたこらみそれのなと
菖蒲の節しらきかれ此菖のつまみよま
ていかくとかの付みてし給はゝ菖のみ
ともかせ歌　一　くすりのみとくや姫よ
のとかましく蓬生此夕さしとも
かうめてりてみかうしても面のなを
かりかく姫よみとけるの時出来てかたくさ

のまく様のすまゐかうくとせのみ中のそ給
はこれて五曲ありさ竹の物語よりうし
一 南のくよ 正三位の信まわろしぬ下
半 表作の大君み正三位の中の人とろし
一 給さくのあり世まぬ世の人 金光明経
回 但擬句お叛仏正覚 者文須功叛 居易通而
斗通みとしらなし 一 らま 蒼丹し
牡丹と云字の數に云り 一 くりかくりう
こうし山吹をかくす わりさいえゐやと
此頃の面らちうら紙橋わくとを侍くまや

うまくりうさとも云り 一 ろうさうこり
のさしくしさうかのいま千さめのくり
ようしうらん入いらくうらしさいく
くいさやくしくりすりし 一 らさむ 昔
武臣かしそ又日の宣命とさるよりて操
射のしわりらけ家門着曲の業書人にや云
と跡とて又ゆのり業むとを子ことに時
らすむとあみるみかて后のうさち
まく二のなとしもらくうよゆりる名様
業十かりし須家傳しと云し此家にわする

ゆくひとまちかへし　一 草のはをひとつめく
茸のさくといふ江の君もなかまゐて
説ちつきぬしてかこつゆゑ
おへもいそかん　一 くつさわかれはなきと
思ふ本はくとくまつとわりまとき　一 くつ人
左経の請 正元四年 小世行幸の時 藤人
左京の源済喜と申侍りて 雉一枝中宮之
まゐらせ侍りける例のごとし　一 くちなし こまこ
つまの末にも 世人皆濁我独清 衆人皆酔我独醒
一 くつ人不　遠人不よみけりも六条院也

一 くんとう　善夜言くみえたる内
一 くわんぶつの月待　一説云 月待のうちへの人のさえ経て
つきしけれや 無　一 くんけ 同文云 義和也
四月八日 諸律師 傳灯大法師 修静 安祐
濯源 受娘 行灌仏事 推古天皇十四年 始
毎年四月八日設斎会 日本紀　一 まつり
やよひのさいしよの薬師もとのやくしゆたち
うち左京みしりあはすとつり
一 くゐなのたゝくと　橘と罷らと詞
つまくとてし 源氏とし称まく人ゆかし

よしそよきをとしこゝろさすをかめん

一 くゝすの　元正天皇霊亀元年内裏に

いゝ霊亀の比しくゝすのはしまり寛仁二

年五月五日陣定ありて菖蒲をさ

さくてりぬさしめ給よくゝすはくをまうけて

らんしをいはふし又字治記にもくすのたま

すのまきくすとよへり　一 五色のみかきをと

结しひも捧とはのけいは黄かりをあくく　一

春のあさましきはなとまゝしき

一（上方のりとし）くらう

九重 文中　文中とくゝまもしふへし

御院

一 くすりのうた　勝者ハ侍座よて

指をとゝりさまくれつゝ手すも侍座の

ありハ日月の光をもわけすもし礼記問

喪服寝着梵壇衰服之をたし

一 くすさらそいは　よろぬ母のゆく初ちれ

いはくまもけ手すもし吉田川よくゝりきゝそん

あらし　一 元霧と云候まと仙人ちゝの

ゆく雲霞の中よまよりけむ仙人やうとし

一（あや）くらつゝゝて　勅定とせ　神らゝて向也

一（うき母）くすくを　秘とらめ云ひの云ひようされち

まくさそう　一たらんしせよ　巻ねしらん
すしわらわもを　一くくのむらひよ綺信
すき人のこしし　雨月集　詞巖為人不喜見
江家請　後拾遺　一くそうら庠き
古今集の序にも　くそものよ名有り
一 しらぬ事とみぬ　死屍　橋本語らむ　折
しらまめのしくく　女ゆりてしりかへる
一 後すと　古後は家々のあまたとちらし
一 きみもらうま　猪川　差みえ山すて
わかりかきともよ　ふ風々をうえ四のくもとも

源氏国字巻第九

や

一 庭んしきうき　女山羊しのこし上編ま人
とやしきんは後きさんのしとつしきれ
ぬりのすわくやむしくすもしいそう
一 やうきい　光振寺とり　一 やうきらしても
い衛し　猴　狼　豺き　一 やまもしへ　秋色
のあさし男なさんのしとしまへすとやすきお
人まみをかひしきあらとさきへしのを
右京仲と　光春云るきまそしまりしい

有し桐もとの朝より新人ハまことかゝしこう
つまりくハ云兼人のし　一　山の出る
ハ渡してえし久かれ此早もし　任よハするり
うもてうし　一　やそて　こうりしやうう
なりのし　一　やし　色とつりえそり
一　や　ともりやしいかうえし　一　やさうん三
出し又扇しかよる人〳〵　一　やうゝり
さ絵うりと同し　一　やうらいの十もろ人
楊名介　三十のろうしや　一　いつし　新頭左兵衛
中源氏物語　やうさいの我此よくと安等お

后よ政山行してや遠うけの若京職頭卿下
つまそ給しまえ久包の宮ホ卿の宮乃
うろし　悉方頭の
わすてまむしらつて人さ乍　さうの久数
山うしり物をうえ　一　こうしえの付
王　左兵の扇此詞し　一　山の此山のく
源よさ人月とお手本しうりみれ
一　山りと　かえひこ同　任しこおとえとれし
一　こく　山とつりのへは数山のをやちもこ人
一　いこみるとかし　一　やしり　色扇　やと

らうし　一やよひ　三月のうゑの月をやう
まそしめし　正月はむつき　二月はきさらき
四月うつき　五月さつき　何事もよみ也
一うつき　裏白のさかきは西あしらひむ
やまつゝしはやまくらす花しらう也
一山の子もおもうし　琴のちくへ立て
つかさのよりくるり池にえりもうけて云
こゝわり　一山ふきはよりのはくゝきまで居
花のつゝと様花ちるとも
をも見いともえやさめて
一やよひえ也
一ご三うさかま 局はゆり

くにつ神は地祇と云し　山祇とかいては
山つみ神と読しうは地居也　一やまひめと
おほやまつみのこて新古新院やまま
おほやまつみのかみとくと云り花宴
辛の九月は新古此所くらりよりて
しるひ今古文新院のいふよりて
神とうら多ふよや也云　一山て集
日本紀 古老　豊可信ままやまとと云よや
一三月廿日わすれのかみて　西宮左大臣
右寛府之　安和二　三月廿六日

一 三月のついたちよりはしめの巳の日三月朔日
よりはしめの巳とし 世風記云三月上巳桃花
水下に特祓会為康須 漢書礼儀志云三月
上巳日官人並禊飲於東流水上 上巳祓禊
のこと論語にも成れり三月桃花水下時
よ鄭国之俗と招魂続魄と祓除不
祥 一 みつのかしは 六帖 みつの上巳
せとみゆきて山桜はあれからのこと出家と
りすとかへりしより 一 やよひ 萩原
山人のわりさころも 文選 潘安仁 笙賦曰

書下蓋簇 事文類聚 書斬
之少卿光育見上巳 帝日后背濯於見
六朝生会臣書大如几今東方わたりのとこ
書の歎年 一 桃花 山ふらいまふうりをれしらい
山人のふりて 伊勢 遠定 いわんとも
十月上巳 わりさきをしは 松人のうたとなり
一 やよひしもの 宗祇 桃の花く 万葉集 云
三月三日 大伴家持 競に 三月まで
し 鈍 花山に 報時 訳同 も此哥判し歌
松山の花咲とこて いまのそくいはりすみ出不成て

一やうつて　うつてや　一やくしハみとも役よ
うき嫌し　一やましろ　わかのうわし
しろの也　一やうさのそしやハまつくに嫌
松浦　若嫌ハ同社　河ふし　若嫌ハ八幡同社
若嫌ハちくせん神功皇后し　一やまきの
とりも　柳ハ面白くうつかと　春ハ卯花と
きし　一やまとうつらかわつて花かえみ
わそうすくすきとやまさとらし
一やまとしき　つやまふちし　一やましとし
初琴の名句嫌し　これハ篇そてハ其かの

しくらやみつくてうたん初雪ハ涼六八節し
一やまくわすくやりく　たかめてハ下うう
若とおふるや　一やまぶきうつへし
ささしてやさとえ不ぬしらうへし
一やまさのとうさ　半日ちうすよ若すと
えのりさのハ又ハ付きしもぬし
しや　一若りうきの又付き中ねし　桜梅
ハ五月より大月すつや　夏ハ柳とうす
夏ハ卯花とも同也　一柳の葉とりとうう夏
かくべき　史記曰楚有養由基者善射也

云柳葉百歩而射之百發而百中ニ唐人説
者程の人皆曰云射　一 山所のもしすりの竹の
かいは賀茂臨時祭舞人竹文青摺袍蒲萄染
下襲地摺袴合袴浮線綾桐文青摺袍柳
色下襲紅白綾袴合大口糸毛半臂法門常寺
系下付之　畀　帥のつき東遊の装束
や　一 柳とたうりてつりさん所揚柳
白き文をしらく所柳草花をぬくとも文
ほるらつく　一 揚城院の御笠　揚城院の
御方にも成りて文貞保親王も歌よみたりしと

りその成りてよみ奉るへく所より給て始し
一 山藍衣とうた　は祠巻の名あらぬ名
よふうた　一 山ふりいつよりかうと多
事のわけはしさ山に住の人どもへうるさや
の人いふうしとやつの山にあそひとし
といふうたへし　一 中との母　返しもの
やまとうた　一 山ひれのうた　山のみは
山の物とのたまはし　一 やまとかは　やまと
まつりし　一 荒して宮　弟とりつのれ
ゆふしたのふしけて　一 山宮丸　声とい

庭ならし萩くのこ丸うすぬわつらん
あくるをとりやすらむ 一山路の冬こもり
ころもよりてこふかつさうすへてそ不突仏
いつ見えそうしもりわの中来しけ
ひとめうひしゆつてや更しつらんとの
つまや 一座つしらしのは 菊ちしらけ
えりいつてやてうそ 一やとり木
とひしやとりてうり不しわてうひハ一路て
わしかさんとのかし 我生のくさいかり
こしと守出きさへもりききさ 一やのさつと

家の還し 一やとり木 春の夫乃守す
ちひ出ちり 一座つうハ 我と雁つきて
ゆかりうれしりしきの洞し 一やうれの営
ふさ舟の孩のは守らん 露りてゆつうちつ
三月よそのまうつ院くハ蓑つてお林
ころに渡わりあきしこ舟ハうわらの堀
涙ハさうさんよ守後くさいしきうさ
しょうさうんすうと

ま

一 よしゆき 百夜りし夜千の洞し西行ー

ひらのもじ　一 まいりもの　儲宮まゐる
なり　一 まいりつかせ給　還　一 まいりのあり
せらるゝ　参進　のうち記　京昇ともいふ
一 まさられます　のりするよ同なり
一 まかでますん　まいりつかせまかでてまいり給あへ
まかりつかもし　一 まとつる　御まへ入り
一 又いひや給ては　みてえ表の肩下ひく
まいりや給ふしとおり　のしよゆの之給
そすいはかりのゆるし　一 まゆかるし
曲るのすべし　一 まへしゆるよ　被用し

御書のロすまきもたもし　一 まねつら　定ら
一 まさ中のまゝよ　法氏はゆる中おもくの
御給よいろしくともくよりのそてく
いつの　一 まいりわすらりさく　菊堂
ふりときすよのとうあ給ずとおり
一 まかまくとし　御院まさしよさ題
一 さかいまかとつまりのそてのや
一 まんな　まさし　一 まする　すつのむや
一 ましし　まへかりて言　一 御いうし
まへし　一 まる　被しくもしさまし

一まくらと　枕也　一まくらこそて　枕のう
すゝまひのくハ人の目をきよろふ
一まつりごと　清涼殿にてありことや
一まさよすゝる也　八月九月也　白氏文集
一ましまひら　厩術かれうつゝのうた
一まのあたり手もつて　をひやかす稚
一まつとしや　菜乃　みなしたしハ源氏物語
うれのうりしや　まうてしハ御ときの
らしそのましそくとみえたのも
一まん人　まうふしらし　一まうて人

くらて　一　松の戸あわせう　貞松歌蔵
らとしうる宮ゟもこれとうれの姓乃は
くろわるゆくてし　一　まんまうつ　昭けハ
迎て百まの月　とつさとつやさに
とりを家司ハ入るくら殿のうつ手て
とつさとつや　一　ましゆきさるとわて
まく母すさゆく祖母やうつくいけるい
三月の昉とてものうして法服のきらし
ちうくハ寸え此家をさゝすてしまゆ
こうえしい紅梅もいる柠枼梅桜すくえわら

こまくとゝへし　一　まつら　まつらく
あさちしくとをおもひすかれ
一　まつりなかり　家よりていかゝの事なりや
一　まうかや　いそしけりとよつし
一　まくとちもしくて　きたのう時歌枕續
一　ますちらあめて鈎かなり　今の
ゐかひうにするまやて五言いますて
源の市ふ家にまりてしわりくこそや
一　まくうまさつくをて　定家の説ましくさ
そこに時ゆくらんとし　摩耶那沙ゆかえ

一　ますらをのいのちのうき　為の上もかきの雨
よ鉄のれしふくとこし　一　ますかゝ　沙ゆかえ
一　ますかや　まてとうしし　歌の筆あわし
一　まいくさ　時し　一　まんえふしてゆる十まと
西宮行に　端午日舞人　部長唱　万ま家ホ
宴正祿　僧伝給　万ま家　元正寺布
煌アる家僧伽之冊揮之　今案　万ま家ハすてく八句
多人成お御く
の詞しうきく信看ようらしくおもふの詞
いのま万葉歌とさすつし　端午は舞人
乃ままよゆみまれと源氏乃宮のうち

すゑひろのなかにてさらに二寸とさたむへし
作り花　一 みつちらはなて　一 的いやまけの事
一 的いよいの方々　一 ちんすのまくはりやう
花もんのまくはしくまくはしの事
みちたりくまにまとはけいしとあつかはすと
そのやうしたすまさんはあてもちられ文字
すまくはうきてさためへし　一 あいさつこゝろさし
まいとも方のあしてとし　内外典の書まても
春才一 才二のしとの歌わりあはせて
あかくわかや　一 まとのこへし　の遊し的

射らいやし　一 まとのくしをとうけ外と内堂
し殊とのあふられやし　一 まさいしくと秋葉
ととのとらうては歳早わりこうはし
一 まいりつとく　曲馬やまたのやうんと
しかくて外のもらし　殊にへ定りて殊
いそ書とかしり殊しや　一 まとりいさため
にかるのいかいるは丈夫し直かりやまと
いかなくとしや　一 まつくへきしく　的人
のまたこさみれかうつる内ととうつります
かい用しつへきまはいとくしるる

よそのゆくへと　一松の緒とは　琴の心なる
あまなし　一松緒れわさの　琴れかりいふ
まくすまぬしりしくといふさつて
又今まかさきつきもとてつうそて候ん
こしや　一松とくとうつるは　昔しも村山の經
新豊に晴奴井宮邑　白氏文集　一松のくすり
さ秦人王莽舎松葉不飢　百七十余年
すいのとつかし　一まくすさかるさ
金中をんすさかし　一まつてことれし
よさし　一まりもしらりしうてころう

よまとし　一まつのねの松をきゝてち
なると遠ざかりてかつらくと極まつるの
なる杖極　和尚　未石那利　一まさかりの
かりいかきりしまゝかりまつてゆうき
うへ松まうくより　一まつりはまの
拾遺宮鬘となりて　黄玉の華は中に又みえ
すれは　一松宮の花のちるや　一まつらの園頃
は卿し　一まかへ　なへし　一まかたき
まへ紫し　一まつろくしく　松宮　一方
一　まつらきんとも　又まし　一まさくりもゐ

さらのうきもよてけうよふとも

け

一けうこの支度　掛手鏡の三四位乃よう
はせうく〻支度よら隠れもらてせう
みらりてハ三りつかうこハ中の承し

一久ふちし出く三ハありても　文度乃室その
まくとミり　もミやもやし　一けうて　おつひなうし　大事し
一草うわりまへ　母ことし

一久しさそき　これしくきらの給ひつきて
一けうひ　気　けかれ　敬勢

一きらう　法月　揚月　一きうさハけうね
名すしくハわりのてし　不下留　不性
一けうらさ　気と　一けらう　下宿し
一華うそく　勝息し　一きうさん　素のぬ
めし　一けさう　急起し　一けりうハお
よつさ出そそしさわやし　一きうさくさ
気類　気形　一けかちうう　気出て
うさし　一きさしれぬる　気ともうし
一久しきわりるのうし忠　さすうめきし
うしきいうけむらうさし　一けうらひまひ

よつよみちのく源氏の物起よまとしいてし
とかりとつよ好きなのし 一ぶんとその料を
うひも 絵五し 都ましまきんめきと云
歌式し 一名つりきわつ 指もものしらつ
生名つりのやとし 一名(わきのつ)つりてすとよ
ぐを千すうとうつてきし 一けさやう清方
一源氏の物やまとし さ源氏郭モ連源氏
の外と名つすし 光源氏よわ千
一(わかい)けさく 歌道の物義し 一(源戸)けんすし 巻
一(わし)けうくとこ千人さ 歌くとこ千すつきあら

無くとも千人きのてし 一(まつき)けてんこ日の勘
いふ是非物志し 是非二の道は又ひ六日済
すくし又一流けそうして物まうつきあ
しのゆへし京よのね物まうわきあ見し
一(とちき)けうもんちかりも 掲雲わいふ方太郎
一けうさし 源氏ていやうとん(よの)とし
一けうわう詞のりえりて 雑林の人出詞
すくし 韻乃字い切韻よて 何字とよて
韻よみすつと云けてき又詞乃中よ韻と
こく詞の文字乃中年永の字よよて

韻よりはまたりの文は韻よりても作者の心すうちよる付よりは　一源氏物かたりこそ侍よむかしの中宮のうち名宮の女御中宮源氏の姓と称されしも帝も親王の御母とい皆源氏よりまかしくは存氏の中後まてしりや　一けさうしうて　化粧のくしくてうて　一きしき　花けさやうちかたん潔斎とん　一けさう　飛蛇されしもつくいちうくわんたりのて　きんとうれき
一きやん　家摂家のこと侍ようて

一せうせん　あせんて　一けりは倉をすと　花文選は花枝誦し　謝恵連詩の宮姫慮万葉き我朝文選とも申して武蔵頭文選ときんひしやうとちりしもは衣のさうと云尚付は穀の望文字かとしうのうし右暗まくけ比乃花とは時節草の紙とうち衣の世衣花園よ流乃花も　一けりや　たうしうてまつうふ声は乃音は男大せんとよくかしく家のうちくをしてのかうと女の方やさつう人は人もけりくとかきよりうそけかうんととる

くろと弁かわらうひきてもう思ひとゝやまし
といふうやうらうきさは家のとも引とまへ
まけかうの氣みて中しのゆ音しうても
花さは物語なり句とりてけふにて侍るを
みゝしもも出りうすなか歌へしまやけうち字
けしきうすきなしとかへし 一 源氏のさうつき
侍り 狭衣物語は源氏よりつき侍り
め語りしといふはりの外のゆとうちもえあり
一 ゆへさ（よまし） 堅題 とうふかへし 一 まうしのなき
ち 勝士言意風よきは説言等主なし

一 けふはうらさくらし 夕寡ながめ侍
よ世中をむけまつりしてはなうれしや侍
らしとやとせしさり侍て秋のゝべくさゝ也
とてはのかたまま語りや 一 源中納言 意
中納言のかへし 紅川の東まもみゆ又 推也
まし 中納言よ成りにとまりて 豊光殿の侍
するへし 紅梅 紅川 推かの侍るとれ
よろしは 深き事ても のゝ 混乱ともすゝ
意の字数へも雅也 乃こともけりうま
秋のとき 不ぬよ 老将寸月楽の ころ 今と勅之

一 げんざい始 春の始に云 呼 貝殻のさし又
貝覆し きそうとさる子ともわけんそう
ともに物もわり用ふや 一 けいし 当春し
一 けいろ 僕し 一 けやし 三夜と春の
ゆくとわり もみうを同し 一 けうのとし
弟有 一 けさう 化生 一 けうやく 採薬
ゆとうてよりをとさりそめけよ ゆとはらくさ
ふ
一 やきもの 皇子七歳にてつきてまき 桃木
りりて四経 孝経序より人家と行そうし

ゆけたし 元 四経 孝経式ハ自覧論孝とよ
三もう始らし 七歳の例多し 一 うえり始
軍下端午のまし是端し 一 かうつい 花
壽会し 一 けうそう 五風よりてゑ
一 二つもうち人 貧福の二つなし 富家
の女当家と号 姪其妻貧家女罪家と
晩春形姑 文集 一 事まつり 俗よ云月
一 うゐやう 風病し 又 脾病し
一 うらま 不意し 一 うつわり 俘との分ハ
一 うりなんとよ句 一 うすまう 不用し

一うちきのこしらへき　家記　きぬとよみて
こしかけと二疊とも云　かさねよしうらはお
ともかへと云用まじ　一みのんまうめん
すさと同し不審　一つうき　東流雲
今文母不審なりや　一かへとくろし
て脂花　あてうまてりの見分くるさ
や勝ふ同　一うせこ　外題も　一うちへよ
さくいふし　一二ろのさい　かさ成お花
堂し申すわんらすの不も　一字んかさい
のみうり　書契かさい家大白家　異如お通

花色　叙春契記　一たきのつきぬてんと
ふきりのうつてつくりなきしむゆも
まれし子すの柳とくり　飯裏かきてん
と云蹴のえし如亂とくり　播き云かきの
うたさめくとる光おめ文在摂川よすも給る
よかまるあるつうしまの寺にも別候
一うくのたりとうもうや　かわともれの落
一かさしらうすの　花語くとひうしすもれは
庭中にて之ようくみ屋とうて此事まで
又人ともい溝下よすくて諸頭すへし

一 若のこゑしらぬ 云 此月七日よりみすへく
て右大臣の亭にて若の花を見るに暦
三年四月十二日先帝前若紫花の宴に和哥
管絃有り 一 やさしかりけ 不諱云人
かりけるさ度し 一 つゆけき花 つゆけき聞
長恨歌 唐玄宗 琵琶 翡翠衾寒誰与共 白
氏文集第十二 長恨歌 川 黄昏旧枕故衾誰
与共ともいへり叶源氏也 永正七 七 六 記之
一 おもやうかはりつゝ 不定也 一 文王の子武王
の弟とかたらしく 史記 魯世家周公自称曰

まさり給ふの御こゝろ此源氏へんとすまんと
うちわたりへは周公旦の徳のおもむき
しくすへは成王のくらゐは帝の時に給さ
まつりことは物語とすまして朱雀
院の脱屣ありては今上にて源氏を引給へるはまし
ころよ朱雀院の御子にて帝の冷泉院の源氏
子孫多くいひ疎遠すなはちやうやうくわしくして源氏
の御こゝろのありさまへは今上に御事を
まもりとらんも也 文王の子武王
弟成王の叔父也 我於天下亦不賤矣

一文集（ぶんしう）　白氏の詩賦をあつめたるなり七十二巻
あり長慶集ともいふ　一らんのつま　蘭　動也
白書司に云　禄唯御名御手奈良し万為礼書
月剣飛将女　如琴　云　玉之山家に今宵物合の結
まい出詠わり書司ハ女房の名也　如琴と云
まことにしら如琴をまゆそて文此つきと
云しらかハ宮方の此しきうつひさら如琴と
一かうきよ（かうきう）　まこしよあつめのちうと云ハ人々の
めかうしくせうくと川かんこまいしたしく
人めしことゝまちまつり　一らいせんかうし　無音

謡也　一紅葉のつき　（うすもみち）　つきしらく蓬しをとし
一かうつせうにと　ころやうのとし　呼ちうてと
つまりかさひとし　一まえの白まゝにつうたとい
向子期思旧賦序曰隣人有吹笛者発
声寥亮追想曩昔遊宴之好　文選
一かうろう（こうろう）　人も　石将ちうちんのふみさく書
名でをし　一こうすて（こう）　よとすてゝかのゆしみゆすをいう
さかりのくこやのぬまてうや
一ちよれかゝるゝ（ちよ）　世丸蘇米もうくさめのや
一うきこひ（とこう）　解し嫁のしつめ人こゝしのへし

一うつほときこえしは 十七ところのひ（二十ところのひ）
りて むかしふるきの名もし此れあそてとまた
のこれ むまたしうつまりてとまれかて
つほり了 つんやくこれよ宮礼ぬとを（菊のくさ）
日本后の后ハむかしやさいおふ夕さりの宮礼
給ひしともせきことあまと拝領させ 宮礼
ともいふ子の文とさやまかすまし 他へ宮礼
そ子と伝へ十礼とさすとハ今の世に
も宮礼ともましたふりのさし儀者ぬと
しつとさし 一うせたましき物やまさ段

新王后以下御座とはまうそれ給し
法紅の御座にハ首ハ此ともなともう比
し出しよ御座もし 一ここうちの名にうり（言）
わきさるえくハ御業方后の袍をよそへきり
一菊衣よしはやつれ給 紫衣なときき給し（きく）
一みちのくよ 奥へまかり下ると肩ここく
平の行元信し 口つ福ふの枝わりと花て
わうそしここ 一てすみてみくうきの遣し
行は海に明分れうのまほ将そうち暁し
一うへしこく 御意と封しこかつこう

しやの橋し　一 かりもとう　如二月に被染て
もかりうきうきし　一 すくもをつみえ上ハ
浅氏乃三えりを如くうまのきえりか茶也し
一 かりきん　尾張かひすんそ一つとみか
一 かうきむのかれ　花　翠の衣よしつかれよ
うまよ　詞をいかうきめとし　一 ささ竹よきさ
しり　物末若中れうと風と果とをする
ききるかもしてきすいといかし　音律を
笛声のてきしよ許て吹つてすかしとして
一 二つ三昔　すかうそかとしもえし

一 うきんきう　浮漂　うきわやし
一 うすく　称契人穀と云事にかりて
物かりて餅をおして　ゆゑて　有葛とかた
てらのかりてかうき竹のつくりて其
中へうくをよへて二うつくさせてつきし
てい雲　如云のてらし　也よくしすて
じうりの如縁にあそし　一 みすそかうりの
花の実形く縁く　豊頭に詞と自然て
一 かりきれし　末大といふ句に言よの中そ
うしとうよ　時に被へしおの縁まへてに許し

一 ふんし 一 やすり 武勇不通となりぬるとき
一 かへ川の ささ舟 みやこのねたかしまの
はしらふとし 一 つとくつき たちはなし
同く 一 うきうのうき 長寿 十 やすり 本章
こ
一 うらわかの時には なしよくなりさすかくしき附たる
一 ふるさとのなき 山吉佳きし 一 住吉の 嵐
のふよわかりけれは 営の 山 かよふうつし
一 うつらく 山葉 一 うつらや 山操
一 くらりつくつやうよ ことれつかりしとき
一 あまの川にて やつて ある 人をわたりけれは
はるとものひしくのまや 一 うたうの 宮様
一 うらのつん 長 歳角合の 玄 蓄とは 則よ
は 御 ますらしのつまとしける 玄は 後蓄
はあらし 後居とりの 背面 洲 ありけれは
都にしゆつ 蓄 とゆのしくはは 宿よ
うそうつし又 時節は 勝のまつてと 回節 時の
うちとるしとくといつれたてし あつ 時節 色
よ 御るとるへし 天下人 あちの 附は 返事
ところつきわりて あまの のかうしてと 御つ なし

七条米屋よわりしよや武ハ今の宮つかと
云ふのゑちうや 一 うしろ 安藝 かた
よう絹し 一 くれなゐ 鎌倉院 あさら
屋のとし 一 つはくをしけりし
一 うら 半わうらうちとよい牛つくまる
ひとへうらて独さし 一 うしえり 立稜し
一 うしろ中よ 紋すうしの中とみ野中
うすいうてし 花しくわの雛わり中さし
一 こうえく 巨の家し ちやうみれ裕し
一 ゆつさうし ゆつうへし 一 うしよし ひ

しょうはにとしつうかうしかうらて
一 うすら 境さ 御衆 女の地ぬ哉し
一 うしへのつんやうま ゆうとみゆうね
人のやうんやうよとゆわの紅氏のまさひ
一 ならてはし 一 ゆ谷し ゆうひゆうひしあさて
ちはし 一 うや こうや とよいふうそてり
一 うしもなく ゆうら絹し 一 うしの多も
紋 つきすゝへとゐさや川うら物つて
ゆわつまね主庭の糸ととよ
まみ中年わとよふゆされはれ生まの

あし　一うちはにて　ゆるやかにあふくも
其のしくらしれまさ　一うちはのさう
やく　うちはゝ唐の景帝の葉菓につ
くりてしめし景帝とうちわし　一九月女房
東陽の嘉王といふ皇帝の御物をなして団
扇を弁つわれの文人博物志ともて頭書
らしてある韻の字とさらりて作く給て
うさすつきさ　一扇つわつるを　中納言て
大徳つとしもうゝへて　一うちわくされは
こらくわりくゆかりし　一こうやきよ

博物志云　竟造團扇　一うちはやのひとく
女房の御前に八月のかゝりはすこしあひ
ねりきゐてひとくうかゝとりうちわやは
ならいさかへし兼ここ蝶を染うらしその
一こみちのて　うみありてしこの此すれ
一うしもか　たきぬとうゆかせしたらし
ゆるゝ扇し　一うのる　九条家上生
つるさや　一ゆうくよ　蛍夕ゐらに女みすめ
まろくてとうれ家の光は源氏かつまくへさ
附へし　一うれきりつうつわ夕ぐれの宮も

雁かりかねとも燕つはくらめとも云也
一 ことねりハ小舎人童 中のかみなとも云也
一 かいくりハ寸の事也 一 うしとハめしおハす
よねのことし 一 わらはハみな人
字しらしようかうて同やおさの
うくとうてつの事也 一 うらうて 河れ
わさわし対かしこくしること
一 うらん さしそくわし 對かや
一 もとよてめ金玉 葬送なかなかる言金玉かな
立物風とく 河さき 一 こみきのあましき舘

かうりとはかうふりの冠を云事
めのわらはの事也 一 これかはまていさう上
まうくとは宿世九日まていまとゝて
しいさうちや 一 は家のかりそ 揚
名所書は和の京九かのとうなし三人合
婦女人み人いはうよ経す一人いなかれ
たをいつらのうりかの事てうなし
ことは
一 小宰相を 字経みやこしみやこ
一 手紙の中のくとゝて は御前の入居本
本所献此時の近習中なすて拙なれ住され

とまてはかさのしかくとまり給ひまへし
一こゝん 護摩 かはらけ 一こしし
うのうひ 儀軌 林堂の経 二年山寺も
つきし 一えんつきしみそ 金剛子 金瑠
もとわたらせしは 元興寺 貞助 仁和寺よ
天さらの 一えん阿弥陀のつか 付 瑠璃壺
くまもとき舟の中よ 給ふな 舍とたまひ
薬師 仏 そしうる 是般 光明し 薬師 仏の壺
と儀軌の道場をすへし 一こんは ありかたき人
みて物しくめつをし 一かしくかうか給へ

かれは 又うつへ 世のよのしも給てつきや
一うちわしとも 長き六條の息子の御し
一うし人のいうん やう 衣服は浄衣 かみのて
まかれいさや うしさるりしかせし くろ
一つもをすくさり かやせうしるうかとも
一御書 鳥羽の子 天子よりうきりてらさん てらし 此
うちふ 給へ人とうれかとも こん とし
へし 一 こしうつ 臣大夫り かめやうは
かきのわうわし 一 かゆみ かうさまそ
ときとさ かりいすさあし

一 このころも 中宮の御絵に風筆に
めでたくおはしますなり又唐絵などの車に京
なみはもとのやうなる人の御絵もみなかへ
しりてうつし給へし伊勢物語二条后
の御詠まうでて参りたまふ 一 清少納言の事
こそ見れ絵と名人居てそのかの清少納言と云名
同じ男踏歌の後二三月にかきて絵かきこ
とをとりたる紙の事よ書き給ふし
一 ここにうちみえのかの月とこそ紫のまよく
かきて月をとりてしかもや 一 さいゆ給へまつそ

いつまでもかくれなき絵なり 二条の御ことを
大臣によせて人にけしきぐくれたる絵は
やがて源氏のあつらく伊勢物語さながらもあへる
うつしとらせ給はれ候はん 一 こよひまでつらう
けてこそ 一 御禊乃日御わたくしの思ひしを京
わりの女院よりかへりてのち東洞院にまう
でてみそぎしたりて十五日女院へ入
今上御女院とは大内の中なる昭陽殿左
近衛府にて御ふりて参りて二の御紫宸殿の
しるしの年の四月より移り給ひけん

よて条のすゑてあらくとあらんてよ御様のと
ありけ其外の御法よ入ありもとあるめ
らしてあるくかり中の月の日賀茂社へ参
後く条のたよ法師し毎年の御様は必
気を勝手よし 下略し 一 ちきわてとしの
うき花園よわくせのまりわりもし
一 さりま あらはよつくりおもしんやうし 三秋未晩
之後文武将軍之天列清和く之情出
御之旧遺全訓附しよしよつくりそ
をくやうや 一 ゆるんのあすわし 懐慶

文経御時清将之世 摩奈利 大盛徳
金剛般若 中央石部
一 ゆるんの日法花経し 一 こまえの物数ん
御をく御分かうしあくよくひし對存まめつき
よりて 小書し 一 そしのてく 花 盤長方
くのあくいわりくとうくとのすしまし
一 こしすまで世為 わ記 よしうしひも
同めし 一 うりすぬ うりのすくとあし
一 ゆりしとと世 ありよい仙隠とあり喜
行のうりもうれりりて高世とあり
序い小条の世をあれかたよ従ちあれ

とくきうのそう　一ゆかりて記してめ
の衰ゆ悪しく旧くしかれは此候とも見
わつかにきこさいわつかにして此寺のせ
一明のてまつりしもせん女な　主殿寮
いかなめにまよ宮もしこしゆしもさ
なれいよ行てしくさうみよとよつはて
いかた人すくとやうの主国へやりてし
いかわのしくとうえんとつきくのかれ
まつほいうさうくれし京しさうさうて
れたつきて前のしきとひちすくへかた

一このころはひまんなんとやうし　八幡検校
居候情ナ国ときさいまく　一わし　国字を
くさひまくやし　一このくうとくえぬと
な兼滋し　一ところかうし　あまし樹の迷
されいかさくとわつうしと去り　一こうとくか
陀　詞とくつひうけすし　一こ寒の給食
毎しあさきれりのてめのくとつけしとえ
付てや　一奏ゆし　天暦二年春のむ丸寮
御膳かはらけ中菜春の乱とく　全代御家の
御行ことれ四角よりて人金まりて私れ於す

てゑりてなくともよいてつゝみとしてさ
つゝみきものゝしや今さらの名
もゝ今まてきをとりてきこえぬときこえへし
楊貴(?)の弁ぞもゝちしとかはり 一 けふ(?)のみ紅り
いはれ中ようやかけの中よりひ紅(?)いは
いみやうんとし 一 こゝやおわりて呼 私哉
一 漢月秋文抄讃なみ日従八位下巨勢網(?)氏
桐(?)鳳 畫師 昌泰二 二月 漢月執筆時平之
一 此書(?)をてわらまきさらんこゝのひかふ
まそくし 一 此弁合と撲(?)ちり比(?)まもの絵合

勝負常の例し 西字の内歌主絵合の中
絵楊(?)も也 西字の内歌主絵合し給ふかりよ
まのさしようゝて給けりしろわり 醍醐
一 これ时よりしまるの人ひつてかきせれ
よくさりに延喜暦れ賀代とさつり
よろ冷泉院といふ天暦のかさりうまそく
給ふや 一 うのをしり内のなかれつらと絵
四堂 流ろこくらし 楼(?)庭ろもにしても楼
庭說(?)は融ろ右(?)流しちにかはやり流(?)源ろの
左の院絶(?)堂(?)し 此楼ふ人てんかへりまし給

當流ニハ一かうしつゝの やうな村枝
のしへひなと羽九下とハ乃ミて山言りハ
わかきかくつゝかく付し 疑ふかうし比蘇芳
ミつのなそても付し 三ヶつかしは 柞は
ねんころもをてをこ 割ぬへし
一 遊居月の名ゝうさとりゆのつ 表上葉
ゆ節しとハくそ其の冬人の中とおつけ迸る
まつしきゆの言し 猶寸ニ中ヽ書也 府
掌ちもしゝすわし 色中りて まる家 繁
頭の家 此段の羽杖 奉世のく来十人かし

かすりゝ此節よのとと添 ゆ父すりの葉ふしと
ミしく ちつしゆうし 陰陽すハ府もの中
とわりのくと月の如 陰陽も皆天添の府也
陰陽ハわらんてをまれりのく家ことし 略し
一 こまやつきくし 鶴へ 角すりくしゝるへし
一 石不ゆ之今ひとゝゝ 大清ニ 三才府の
川時も府しもまんと ゆかし吉内しかハ大
内ミ九女の府り ミ例 うら合はし此女大雨
ミと婿不以大居よ わかてより 依よまて
きや後しりく 一 子とミりもの也 史記 列見

知足明文あるよ 一 むかし男ありけり 嫁のまうと
らうしむかし男よ 假定の女なりし 哢四事源
氏の事いふものふしや 一 初てなむすめて
おとこ人よりけ給ふるへんの受けいふ面
見るかくしもと円裏の男節ともなくし
一 こまりけそ こまりのいふひとを前のことや
一 うさわかしくさん此まり物 いさんい面す
くうしきしわらてはよつみ於葉
の衣さ事ふしかりしうさみいぐよ書沙汰
いらみくうきわし 一 ゆうしきしかめ人る

ましのうとしめ給て 京の女のもとにつかはしける
むさしや 一 こはうきまよ めしの
かすりとまし 一 この月はみそてあり
三月はまのまの給ふし日宰の給ふ月世話よ
狩ましとかしく 一 胡地乃世ととつしやうく
まそくつ 一 胡の地 涼原てかおみ見え 白氏文集
胡地妻児虚棄捐 指揮漢攻胡し時漢人亡於国
而帰漢軍敗之為帰又隠漢攻胡し時亡於
之人類没漢也此時棄胡妻子而漢之入将人剃
園之ち歎 為経人也 仍為国無復之意叶物語歟

一 うしとて 女師いさゝれのつまさし 給ふなくは
師はあらん 一 こまつは 若菜 百葉 産千二
ぬりうるくとも 一 こほり戸もちりうるさ
人はゆるまに石乃の人はしようせやまめと
一 うけたまはり 蝶 まさ流の色しは弁れ
すゝしまふ 丸のうちも 事二つくと宮
子やうしをわうしんのやまもひかり
一 さしいのりとつくりんにかは桜のりん
うさうらはうさにうさや女なはうさるみさ
あそし 一 こまつさやん 若同りかれ 枝らし

一 子富ちなさん川言は未勤 一 てしまさらんりし
さつくらて 菩薩のくつはりの御結髪よりし
ひむし 一 うひうつまはうしぬさま乞 気冷
東孔乃ゐのさまとましみせしかせみと
しくさま云つくさうれまかりの雪人乞れ
あみとしてさうくしのそくしくしと 聖之
ゆりよ女 一 こみ見すら 包い見すらと
しえしうまもさん年まらしく
一 うまのゆうさ 雅香よも御緒の名まかへ
一 こみとわつな ぬとわつさし 一 てまつひらひう

宣

見つきおもて記しよつきぬへしよろしく
いとよくとゝまりわたる荘子に流れ出すて
またひうゐをゐほすうつしまゐらせん
一 ことゝもしうは 川亭未勘 一 こうらさ川お
としうあらぬ 川地しるし 一 田舎のつ
わたんきのえん 有深ありしすのみ下
うきをうとし 一 うしゆひ 宣とこゑて勝て
川ゆすみや 一 こうの手ぬ 百花の手遊
曲ありし 二人 あまきあかへし 円内ぬるもよく是
人あまりや 一 こうしいうまゐのうへ 日見てあり

絵のうれとかりゆめのおそろしやゆめのはて
くいもしこそあるらや 一 うしもみさう
うく しもの御前未しは 猿の敷 枝つきさうて
千
一 かわりてのゝしく 御よしかうよ 尊き
てれちうすへきうしや色も 藤枝の曲尺也
一 ころぬきのとも こうやうはすこうこと
一 もうてしくあらやうみうし
玉のかそく
一 指示る 浄土にあるし 快宮ちの遊をし
一 のやまひらりて 御ゆうきうし
一 手傳つきの紙 賀茂の宮寺人 九条の紙也

氷月と用らるゝハ東遊とまうしてゆへて
一 こゝろ持の行事 并 立秋より立冬まではまさ
そくしきハ秋にかゝる事の事なり
もの十月せまし 一 小松原すゑにのあらひ
まをさよりのうちのまく深く年くとつ花
りんなれ 一 こりの 亀物 琥珀なとしきそ
献く羊杉し 一 こまのさんよや 三段ハさ
寿し 乱声 舞踏 奏して手まよまうしたり 左
のまひハ 唐 右のまひハ高麗し 一 こひまた
人みるを 豊みるときてすゝせいはして

わらくしるくしくし 一 このくさりつまつも
しらし 元慶 文武天皇も深く稽古と
并 うつりのとしまち在まさて 一 このさく
さんさいのれさくわうしてとよりはてうれ
擡手 二ゐ行幸で水宇鎮守蒼海
波文 嘉春 河も立し 一 又云のちうそ
とのせし 嘉楽用し出つ 皆 万秋楽又云临
まいり破 中かつゆて 又云の破 華も云
なりさく 一 こふし 統七そうめ 世其の
やくのさしき世 よ深氏よせつりれみて

しよしやうさん巻そハ十巻かふりと見ゆるなり

一 くゆしひてく ゆゑんよくよくつしき事也

一 つかのくすくうわうの人ハ 十善戒云小乗戒也

比戒菩薩大比戒 十善ハ世間菩薩道也

一 五かいとハ 殺生偸盗邪婬妄語飲酒

一 ふもんの御誦経 今年の御祈

祈りハ年千ちゃや 一 こゑしきのまへ本

のちよろしくよりくよりくのあつくあつくのふかく

とよれさうよこそありとゆつさかふのならり

霞の家とハ物思ひし 一 こうとよしくもりの

ねよきハ六弦ありしかハみなといふなり

柴もあ外とハ楊貴妃とう 一 けんじやうの

ゆうしん唐栄の女房の御琴を楊貴妃

ひのらんよのはし 一 琴のてくしう嬉

楊貴妃これたまわりてのり唐栄の文明とりし

伯の手のへし 書伯牙鍾子期とて二人あり

か琴を引し人 かの鍾子期うせての伯牙

いやう今より後わかしをとそこりのわ

ようむしハむしとてやうかしとしらまし

伯牙絃を断といふなり 一 声よきさりの悲しみ

絲桐のまはりの文字を物まねの初音とも云
一 これハすこしやさしくして 蕭宗ハ想夫恋
といふへきこと文字あそひの心得よや
一 こまもろこしの渡りのうきとも候 柱よ
まてもら絲ハ名物の第一や 一 こしいつさ
ちよ月の夜 三五夜中新月色 二千里外故
人心 一 こうしやう 葉濤 一 こしきこて
しし桔ゆる神 一 こしわれめく 宮ね
と文字との中しきれぬりてのいとゐ
とや 一 ざいにんのかうりとつふまし

一 しよのゑひ こ人のゑ なみつゝ音かね
三十二相ハ非之れ毛完しの者し 石祖宗
羽神香術るまぬり附 一 玉笙て 聖徳
そゑも同 一 いのすりや そそすのゑし
一 このまくやう 松もつまく 砂合はん 一 こひゝらく
様ゑ乃井筆の好さしゆゑん 一 この月
よちうつく 琵琶よ様 わきしる 不と陽月
しきあ白羽し 雲嶠 琵琶 浄云 すゝ月 合掌
よ 一 こひきして 二つのゑす 秋意よし
てらんとらすよ高の山ともけさうハ三らんを

ちやすうひんとねるやうくの成し宮れ
こしん菓のきゆへ三のり菓子ゆしこさよ
ふうてし　一やうさうき　春さよい形ほ意
い意ゆへなれいかさうかさし　十　このきい
うきい亀とさへるり　一こみ系下枝ゆん
けは同中乾飯　殺浮氷一板こん　胡豚
一このそし　ぬ殺しのてつけしきへんそし
いねるてん　一こうしの小唐麺
一うみひとい　小勝一つ稗しるさよ黄て
と稗の常のなそんりのし常のわのいてんれ

殺ちりも三帯とゑ付しうわとつきわ
一このりしらる　毛延香い王飯兎と猿さき
よる兵去　粥香倉まてきつむ令へり
てしくも何も出れしうやけうとおり
一ちうは　蒔の鮎うへし　一流ものつきわ
小芸しや　一このきよるつやしまて春く
ちうものの紙絶へのかついもみちゆへん
一このつり何しるよ令のうわし
一そのちんれんい　ちへ寄とみ次よ遣うう
ゆれるへし　一ちろのく　けんの道うき

すゝりふたや　一　うらかへし　桜花折成て
も同人作十月九日於山階亭寄人千句
梅種木　一　このこいろを　今まてひきこくを
折て縁者して合せし　一　けふのく　つもりし
一　ゆふかほ　はなさつきすゝきあやめかし
一　ふりさめる　折たりて見え落花し　一　ゆふかれ
世の　わかのくさ木　こゑみえし　一　いさゝん
あさひゝやうかうんとし　一　うつくしは
春よろし
以

一　かはらぬ　えたよさゝめのし　一　いさゝましく
さくらさかりし　一　えんとおれは恋ともさし
一　えんよ　譲し　一　ええひとつのもきの花の類
のれうのさかゆきゆく恠さなんとこふ
ましきしのかし　一　えと生まて　えと曲て
さくもすき　せ房ともにのもとみり
一　かりのう　かけうりとよりみ焼物の要とし
ねけうりて恋とは　河　衣裾の事　一　えいのなる
瀟湘は芸文し　集めうろうつくし
一　えいかよしまつるは　年の春て　ゆうの縁曲の

しかるへし　玉藻殿の御事によく見えたり
一 かうふり　冠はまうさする　御冠なきし直衣の人も
冠緌　一 えひのうすきにつけ　白楽天号紀
香山とて三月晦日に素青陽と云日を初て
元微之に別れし時此字の句あり　醉吟先生
香山居士文顕　醒獨吟　一 連長の物語
かりつくはと云は 長物やしくれ又すの
ゆかしさうさんのゆくゑれはとくろい
てんれと云明石入道の事は　延長の御代
つきうりて三條よりめくらされたるか

ちよかい物なとの事丸く有りしとみえたる
のあり出たりし也へ来るとい延長物語
一 えひそめて　葡萄染也　つきれの
みとこうくとうまいつわれいえひとふ
うつよろの色れとみしとき又　縹色の流く
らしつんさうてそてそろし　一 えうう　週局
一 朱雀の寸も　幽霊月牛おゐて人来也
お神前ならせても　一 かわらしつり
礼気し　一 ゆふくう　縹し　一 ゆふつね
殊しわしかう詞し　一 ふうらよ　岩つらぬる

て

一てくるまのせんし　輦のことに侍るへしや

此輦車ハ石階のもとより門のうちの中

まて是を入られし中宮又ハ輦車ともいふ

牛車ハ牛をかけてひかする也　叙今　宜陽

明殿陰陽寮ハ今宮中此下の門内にて温明

殿ハ内侍所ハおはしますし東ハ宜陽門の

中とき陰陽殿ハ西の温明への南ときいまて

の所よりうちへてんよりとしはさうて　ひら

殿ハあのさしとわたらうさやうにくらべよ

御子とみてたまへり延長式ニ曰ニ丈人及親王ハ懐

妊の中らしてとりつらうして其の始終のつゝたらひ

うまれ入　色なの俥と云ハ中此宮の南し

宮門より出中ハ宮の門くとう也ニ秋花渓

かうの車よりいちうさくてそこのかへる

車もこゝうまれ猶そくめく六府の兵人の

やくとてかうく出入するや云　一てくるま

羽有　一宮ス綾　寛平代皇の御事し　延

長の文此門守るの帝井中也此侍そ云と

給ふてまつし云れよめへし　承平乃なに

せしすまのハかうふ神ハ瀬をかくりはさ一
肩をよ後ハゆまてりやまつし注好
集めのきる　一てらし　襴よのきし
一てゝつりて　ゐつりてハ裾ゆふりても苗屋
上裳ハ紐よしてうまつよく細くなるを
さしなハつらし　一纓看　正月朝日の小袖看
とらてうめよハうすし　嗜　後帯をめるめ
庭よ後居有し　一まつしきりはへ　大臣
とらりてしむへし　一ゑよまかつ会の
生大見堅三遠　きしすまりよのはらして

三遠よあつらみきそわらえゑえんよひ
りきてつうし　一時よさまりわの平ゑ人
のたくとゝそつ　一ゑのまゝき　ゑ服し
一ゑゝんちうしきうつよ　天のゑろうまさ
とうしゆうとし　一蝶あらしハ人賣の
けよまひおうしき乾飄ゝうら青花付
東人なるし　一ておもて　事の拝
ようすらさ加へし　一てらさあむら　嗜よ
さりくとぬきよりてゆめりて　一なら人ハ坐ハ
の月まうよめらりすくす　乾　あうえ人ハ禁

中よりさ寺院の者を人各家の者を今
しるてさもくによりかれて畢竟
すかしかりをかてその中よりさん
こともわかし院にて畢竟しりとも
内裏にて何事畢竟を仮に家々の役
にてさふしきるいかなやうく
一てうく　洞むし　一てうきさし給
去る経人をちて於しとよりよみかてかる
しくいきしかこととし　一二人のわさくさ
きわ　わやひさと行とりの事さ物を

まことに家の中しかさ八月大夜よ
れわりし　一てんく　三稿とさいわり
の后かわりしもちゆの本ハ二魔のぬ
くわしいそり